遺物番号	文化層	層位	注記番号	器種	調査区	グリッド	ブロック	石材	接合番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
339	Ⅱ	Ⅳ	C1-271	石核	C 1	F・4	2	頁岩Ⅰ	41	3.20	2.40	0.80	3.0	
340	Ⅱ	Ⅳ	C1-419	剥片	C 1	F・5	2	頁岩Ⅰ	41	4.90	5.80	1.80	51.3	
341	Ⅱ	Ⅳ	C1-288	剥片	C 1	F・4	2	頁岩Ⅰ	42	5.10	5.70	1.20	30.1	
342	Ⅱ	Ⅳ	C1-269	剥片	C 1	F・4	2	頁岩Ⅰ	42	4.10	6.50	1.00	19.0	
343	Ⅱ	Ⅳ	C2-575	微細剥離を有する剥片	C 2	I・6	1	頁岩Ⅱ	－	10.30	5.10	2.10	79.3	
344	Ⅱ	Ⅳ	C2-530	剥片	C 2	J・7	－	頁岩Ⅱ	43	8.60	9.00	1.30	65.5	
345	Ⅱ	Ⅳ	C2-511	石核	C 2	I・7	1	頁岩Ⅱ	43	7.40	9.80	2.40	148.0	
346	Ⅱ	Ⅳ	C2-595	剥片	C 2	I・6	1	頁岩Ⅱ	43	7.70	4.40	2.90	87.9	
347	Ⅱ	Ⅳ	C2-457	二次加工剥片	C 2	G・8	－	頁岩Ⅱ	43	8.00	11.10	2.80	135.8	
348	Ⅱ	Ⅳ	C2-469	サイドスクレイパー	C 2	H・8	－	頁岩Ⅱ	43	9.80	4.70	4.90	143.4	
349	Ⅱ	Ⅳ	C2-468	石核	C 2	H・8	－	頁岩Ⅱ	43	7.50	7.40	4.10	176.6	
350	Ⅱ	Ⅳ	C2-519	微細剥離を有する剥片	C 2	I・7	1	頁岩Ⅱ	43	7.20	4.10	3.30	56.4	
351	Ⅱ	Ⅳ	C2-518	石核	C 2	I・7	1	頁岩Ⅱ	43	5.80	7.60	3.30	155.3	
352	Ⅱ	Ⅳ	D1 Ⅳ-328	ナイフ形石器	D 1	D・11	－	チャートⅠ	－	3.30	1.80	1.00	4.7	
353	Ⅱ	Ⅳ	D1 Ⅳ-490	剥片	D 1	F・10	5	チャートⅠ	44	2.60	2.40	0.80	4.2	
354	Ⅱ	Ⅳ	D1 Ⅳ-489	剥片	D 1	E・10	5	チャートⅠ	44	3.30	2.60	0.60	4.4	
355	Ⅱ	Ⅳ	C1-273	角錐状石器	C 1	E・7	4	チャートⅡ	－	6.90	2.10	1.00	15.8	
356	Ⅱ	Ⅳ	C2-550	エンドスクレイパー	C 2	I・6	1	チャートⅡ	－	3.00	0.90	1.10	8.0	
357	Ⅱ	Ⅳ	C2-583②	ナイフ形石器	C 2	I・6	1	チャートⅢ	－	3.40	2.70	1.20	9.1	
358	Ⅱ	Ⅳ	C2-584	剥片	C 2	I・6	1	チャートⅢ	－	2.70	3.00	0.70	4.8	
359	Ⅱ	Ⅴ	C2 Ⅴ-634	石核	C 2	J・6	1	チャートⅢ	－	2.00	1.80	2.00	6.5	
360	Ⅱ	Ⅴ	D1 Ⅴ'-107	剥片	D 1	G・11	－	チャートⅣ	45	2.20	2.70	1.00	4.0	
361	Ⅱ	Ⅳ	C1-289	石核	C 1	E・7	4	チャートⅣ	45	3.40	3.70	1.50	22.8	
362	Ⅱ	Ⅳ	C1-381①	エンドスクレイパー	C 1	D・7	－	チャートⅤ	－	5.90	4.90	1.20	36.8	
363	Ⅱ	Ⅳ	D1 Ⅳ-325	剥片	D 1	D・11	－	チャートⅤ	－	4.60	5.50	5.30	169.3	
364	Ⅱ	Ⅳ	D1 Ⅳ-324	石核	D 1	D・11	－	チャートⅤ	－	5.30	5.70	2.40	64.2	
365	Ⅱ	Ⅳ	C2-559	台形石器	C 2	I・6	1	チャートⅥ	－	3.30	3.10	0.70	6.6	
366	Ⅱ	Ⅳ	C2-595	角錐状石器	C 2	I・7	－	チャートⅥ	－	6.25	1.90	1.60	14.0	
367	Ⅱ	Ⅳ	D1 Ⅳ-491	角錐状石器	D 1	F・10	5	安山岩	－	3.70	1.50	1.10	6.1	
368	Ⅱ	Ⅳ	D1 Ⅳ-83	ナイフ形石器	D 1	G・12	－	黒曜石Ⅰ	－	3.25	1.95	0.85	3.7	
369	Ⅱ	－	D1 S84-32	石核	D 1	－	－	黒曜石Ⅰ	－	1.70	3.20	1.10	4.7	
370	Ⅱ	Ⅳ	D1 Ⅳ-57	石核	D 1	F・12	－	黒曜石Ⅱ	－	2.40	3.00	2.20	15.2	
371	Ⅱ	Ⅳ	C1-366	敲石	C 1	G・5	2	砂岩	－	6.50	6.20	2.90	146.9	
372	Ⅱ	Ⅳ	C2-602	敲石	C 2	G・8	－	砂岩	－	6.10	5.00	3.70	152.4	
373	Ⅱ	Ⅳ	D1 Ⅳ-309	敲石	D 1	E・11	－	砂岩	－	7.00	3.00	2.15	61.8	
374	Ⅱ	Ⅳ	C2-835	敲石	C 2	H・6	1	砂岩	－	10.70	3.80	1.40	80.7	
375	Ⅱ	Ⅳ	C3 Ⅳ-669	敲石	D 1	E・11	－	砂岩	－	14.55	3.35	3.20	239.1	
376	Ⅱ	Ⅳ	C1-336	敲石	C 1	H・7	－	緑色凝灰岩	－	14.90	2.80	1.90	116.9	
377	Ⅱ	Ⅳ	C2-566＋D1 Ⅳ-306	敲石	C 2 D 1	I・6 E・11	－	泥岩	46	5.40	4.55	3.80	138.5	
378	Ⅱ	Ⅳ	C1-146	磨石	C 1	C・4	－	砂岩	－	12.80	11.50	4.30	938.0	
379	Ⅱ	Ⅳ	C2 h・7	磨石	C 2	H・7	－	砂岩	－	5.00	4.40	3.00	89.9	
380	Ⅱ	Ⅳ	C2-568	磨石	C 2	I・6	1	溶結凝灰岩	－	6.30	5.25	3.10	142.8	
381	Ⅱ	Ⅳ	C4 Ⅳ	磨石	C 4	－	－	溶結凝灰岩	－	8.15	7.70	2.70	245.8	
382	Ⅲ	Ⅳ	D1 Ⅳ-61	細石核	D 1	F・12	－	流紋岩Ⅴ	－	3.40	5.50	2.90	48.7	
383	Ⅲ	－	D1 S51-427②	細石核	D 1	－	－	チャートⅥ	－	2.50	1.30	2.10	7.1	

第19表　C・D区旧石器時代石器計測表6

遺物番号	出土位置	部位	文様および調整		焼成	色調		胎土	備考
			外面	内面		外面	内面		
254	C 2 SZ 1	口縁部	粘土のたるみ 押型文？（剥落のため不明）	沈線文 楕円押型文	良好	明黄褐 にぶい黄橙	明黄褐 にぶい黄橙	4 mm以下の灰褐色・赤褐色粒を含む。	早期
255	C 3	口縁部	貼付突帯文 ナデ	ナデ	良好	明赤褐 にぶい橙	にぶい橙	3 mm以下の灰白粒、1 mm以下の赤褐色粒を含む。	晩期
256	C 2	口縁部	貼付突帯文 条痕調整のち、ナデ	ナデ 剥落のため、調整不明	良好	にぶい赤褐	にぶい赤褐	2 mm以下の灰白色・灰褐色粒を含む。	晩期
257	C 1	胴部	貼付突帯上に竹管状工具による下方からの連続刺突文 ナデ	ナデ 指頭痕	良好	浅黄	浅黄	2～5 mmの白色粒を含む。 3 mm以下の白色・黄白色・灰白色・灰色・褐色・赤褐色・黒褐色粒を多く含む。	晩期
258	C 1	胴部 ～ 底部	条痕文 ナデ	ナデ	良好	にぶい橙	にぶい橙	6 mm以下の赤褐色粒を含む。	晩期

第20表　C区縄文土器観察表

遺物番号	時期	層位	注記番号	器種	調査区	グリッド	石材	接合番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
389	早期	－	D 2 ②	石鏃	D 2	－	チャート		2.15	1.90	0.45	1.1	
390	早期	Ⅲ	D1 Ⅲ-252②	石鏃	D 1	D・10	チャート		2.30	1.90	0.70	0.9	
391	早期	Ⅲ	D1-1	石鏃	D 1	D・9	チャート		2.75	1.95	1.00	3.2	
392	早期	Ⅲ	D1 Ⅲ-196	石鏃	D 1	C・10	黒曜石(姫島)		2.55	1.90	0.40	1.5	
393	早期	Ⅲ	D1 Ⅲ-275	石鏃	D 1	C・9	チャート		3.45	2.80	0.50	3.6	
394	早期	Ⅲ	D1 Ⅲ-130	石鏃	D 1	C・10	頁岩		1.60	1.45	0.35	0.5	
395	早期	Ⅲ	D1 ⅢC・9	石鏃	D 1	C・9	チャート		2.10	1.50	0.30	0.6	
396	早期	Ⅲ	D1 Ⅲ-193②	石鏃	D 1	C・10	黒曜石(姫島)		2.35	1.95	0.50	1.0	
397	早期	Ⅲ	D1 Ⅲ-244	尖頭器	D 1	D・9	頁岩		7.00	4.10	1.80	47.6	
398	早期	Ⅲ	C1-134	尖頭器	C 1	C・4	流紋岩		10.15	2.20	1.00	16.8	
399	早期	Ⅲ	D1-11②	エンドスクレイパー	D 1	C・8	チャート		1.90	1.80	0.60	1.6	
400	早期	Ⅲ	D1 Ⅲ-187	フランドスクレイパー	D 1	C・9	流紋岩		2.30	1.75	0.85	2.7	
401	早期	Ⅲ	D1 Ⅲ216②	二次加工剥片	D 1	D・10	チャート		2.60	2.00	1.10	5.3	
402	早期	Ⅲ	D1 Ⅲ-256②	二次加工剥片	D 1	D・10	チャート		3.40	2.40	1.20	8.0	
403	早期	Ⅲ	D1 Ⅲ-340	二次加工剥片	D 1	C・10	黒曜石(姫島)	47	2.70	3.00	1.00	6.6	
404	早期	－	カクラン	二次加工剥片	D 1	－	黒曜石(姫島)	47	2.20	3.50	0.80	6.6	
405	早期	Ⅲ	D1-13	石槍	D 1	C・9	チャート		2.40	4.80	1.50	18.2	
406	早期	－	C2 SZ2	磨製石斧	C 2	－	砂岩		6.30	1.90	1.10	18.8	
407	早期	Ⅲ	D1 Ⅲ-213	礫器	D 1	D・10	ホルンフェルス		7.10	7.50	3.80	258.0	
408	晩期	－	D1 SG1-253	石錘	D 1	－	千枚岩		9.80	7.90	1.70	187.0	
409	晩期	Ⅳ	C1-68	石錘	C 1	B・4	砂岩		8.60	8.60	1.40	134.9	
410	早期	Ⅲ	D1-19＋D1-20	磨石	D 1	C・8	砂岩		10.00	9.00	4.20	489.8	
411	早期	Ⅳ	D1 Ⅳ-67	凹石	C 1	F・12	砂岩		11.75	11.00	5.60	1,024.0	
412	早期	SG1	D1 SG1-375	凹石	D 1	－	砂岩		11.00	8.75	4.10	675.9	
413	早期	Ⅳ	D1 Ⅳ-381①	砥石	D 1	D・9	砂岩		17.80	4.35	2.50	463.3	
414	早期	Ⅳ	D1 Ⅳ-436	砥石	D 1	D・10	砂岩		20.40	8.40	3.80	1,223.0	
415	早期	Ⅲ	C1-27	台石	C 1	C・8	砂岩		25.60	12.20	5.90	2,740.0	

第21表　C・D区縄文時代石器計測表

第３節　中近世の遺構と遺物

１．Ｃ１区（第99図）

Ｃ１区は丘陵裾部で、70×60mと最も広い調査区である。掘立柱建物、土坑、ピット群が検出された。

（１）掘立柱建物（ＳＢ１～12、第99図）

ＳＢ１は、調査区中央南寄りの位置に検出した。１×５間で北面に庇を持つ。棟方向は東西（Ｎ－79°－Ｗ）で、梁行4.00m、桁行11.30mである。建物東側に、約１mの間隔をおいて、一直線状に並ぶピット列が見られた。建物棟方向とぴったりと直交しており、区画のため、あるいは目隠しのための柵列の可能性が高い。

ＳＢ２は、Ｃ１区北東部に検出した。２×４間で、棟方向は南北（Ｎ－18°－Ｅ）である。梁行4.20m、桁行7.60mで、柱穴深は平均で35cmである。

ＳＢ３は、ＳＢ２と一部が重複している。２×５間で、棟方向は南北（Ｎ－20°－Ｅ）である。梁行4.90m、桁行9.20mで、柱穴深は平均で40cmである。

ＳＢ４は、Ｃ１区中央やや北よりに位置する。１×２間で、棟方向は南北（Ｎ－19°－Ｅ）である。梁行3.00m、桁行5.80mを測る。

ＳＢ５は、Ｃ１区の中央、ＳＢ４に隣接して検出した。２×５間で、棟方向は南北（Ｎ－17°－Ｅ）である。梁行5.00m、桁行10.20mを測る。柱穴は、径60～80cm、深さ50cmと比較的規模が大きい。

ＳＢ６は、東側でＳＢ５と一部重複し、西側でＳＢ７と一部重複している。２×４間で、棟方向は東西（Ｎ－73°－Ｗ）である。梁行4.90m、桁行8.00mを測る。

ＳＢ７は、ＳＢ６と一部重複している。１×２間で、棟方向は南北（Ｎ－18°－Ｅ）である。梁行3.00m、桁行5.00mを測る。

ＳＢ８は、ＳＢ７に隣接し、Ｃ１区中央やや西寄りに検出した。２×４間で、棟方向は南北（Ｎ－18°－Ｅ）である。梁行4.00m、桁行10.50mを測る。柱穴は、径60～80cm、深さ50cmと比較的規模が大きく、ＳＢ５に近似する。

ＳＢ９は、ＳＢ２の北側に検出した。２×２間で、棟方向は東西（Ｎ－68°－Ｗ）である。
梁行3.10m、桁行4.90mを測る。

ＳＢ10は、ＳＢ９の北側、Ｃ１区の北端に検出した。２×４間で、棟方向は東西（Ｎ－65°－Ｗ）である。梁行5.00m、桁行9.20mを測る。

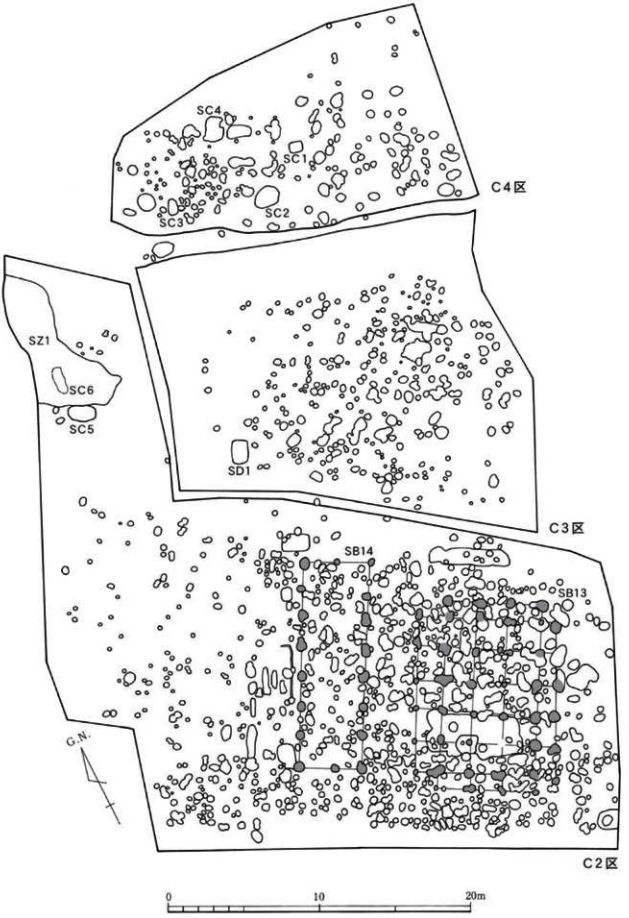
ＳＢ11は、ＳＢ10の西側、Ｃ１区の北端に検出した。２×４間で、棟方向は南北（Ｎ－22°－Ｅ）である。梁行5.00m、桁行7.70mを測る。柱穴は、径50～60cm、深さ40cmと比較的規模が大きい。

ＳＢ12は、ＳＢ11の西に隣接する。２×３間で、棟方向は南北（Ｎ－23°－Ｅ）である。
梁行5.00m、桁行7.20mを測る。ＳＢ11に隣接し棟方位もほぼ一致するが、両者の間隔は１m以下と密接しているため、同時存在は考えにくい。

２．Ｃ２区（第100図）

Ｃ２区は、Ｃ１区の北側、１m程度の段差を上がったテラス面で、Ｌ字形に北側に拡がっている。足の踏み場がないほどに密集したピット群を検出し、掘立柱建物２棟を認定した。北端部の西向き斜面と

第99図　C１区　遺構分布図（S＝１／250）



第100図　C2区，C3区，C4区　遺構分布図（1／250）

なる部分で、貝殻の集積が確認され、調査の結果、ゴミの投棄場と推測された。また、近接してウシ・ウマの埋葬が確認された。

（1）掘立柱建物（ＳＢ13・14、第100図）

ＳＢ13は、Ｃ２区東半に検出した。３×５間の総柱で、４面に庇を有する非常に規模の大きな建物である。棟方向は南北（Ｎ－29°－Ｅ）で、梁行6.00ｍ、桁行10.00ｍを測る。多数のピットが集中して検出された場所であったが、ＳＢ13の柱穴は、径40～50㎝、深さが平均して80～100㎝と他より規模が大きく、また、埋土に若干の灰色シルトが含まれていたことから、区分することが可能であった。

ＳＢ14は、ＳＢ13の西側に検出した。２×７間で、棟方向は南北（Ｎ－29°－Ｅ）である。梁行4.30ｍ、桁行13.70ｍと非常に桁行の長い規模の大きな建物である。ＳＢ13とＳＢ14は、棟方位が一致しており、ともに大規模建物でありながら、その間隔は３ｍ以上と十分な距離を持つことから、同時存在した可能性が高い。

（2）土坑（ＳＣ５・６、第100図・第101図）

ＳＣ５は、Ｃ２区北西部に検出した。1.76×1.06ｍの楕円形で、検出面からの深さ40㎝を測る。ウマ一頭分のほぼ全身の骨が出土した。頭部から頸部、前肢骨、脊椎、後肢骨など横臥位で乱れのない状態であり、丁寧に埋葬された状況がうかがわれる。

ＳＣ６は、Ｃ２区北西部に見られた貝殻の集積の範囲内に検出された。人頭大の石や陶器大甕の破片が集中し、その中にウシの頭骨や肢骨が見られた。周囲は西に向かって強く傾斜しており、土坑としての掘り込みは不明瞭であったが、石や甕破片、骨の分布が1.90×0.80ｍの範囲に集中しており、また、断面の観察から底面に若干の窪みが見られることから、本来は長方形の土坑が伴っていたものと考えられる。陶器破片は、大甕を人為的に打ち割り、平面的に敷き並べた状況であることから、単に廃棄したのではなく、ウシを丁寧に埋葬したものと考えられる。しかし、ＳＣ５に比べ骨の残存度が低く、下顎骨が数片に分かれ、やや離れた位置から出土した状況を見ると、埋葬後に何らかの攪乱を受けたか、傾斜地であるために小規模な崩落が起きたことが推定される。

（3）貝殻等の集積（ＳＺ１、第100図）

Ｃ２区北西部に見られた。8.00×5.50ｍの範囲で、西向き斜面に東側から投棄したようにカキ、ハマグリ、サザエなど大量の貝殻や魚骨、獣骨等が堆積していた。陶磁器や土師質土器の破片、古銭等も混入していた。

出土した貝種と総量は第25表のとおりである。多くの貝は砕けて破片となっており個体数を計上することは困難であることから、貝種毎に重量を計測した。内湾の潮間帯や浅海の砂泥、岩礁に生息する食用の貝が大部分を占めるが、タニシやカワニナなど淡水性のものや、ヤマタニシなど陸貝も多少含まれている。また、明らかに直火により焼かれた痕跡が認められるものも見られた。

ＳＺ１は、ＳＢ13、ＳＢ14といった大型建物の背後に位置し、大量の貝殻や魚骨、土器や陶磁器小片などが出土していることから、その性格は、屋敷地の背後の斜面に生活ゴミを投棄した痕跡と判断される。

3．C３区・C４区（第100図）

C３区・C４区は、C２区の北側に階段状に整地された比較的狭いテラス面で、0.5～1.0mの段差がある。土壙墓、土坑のほかにピット群が検出されたが、明確な掘立柱建物は認定できなかった。

（1）土壙墓（SD１、第100図・第101図）

C３区南西隅に検出した。1.56×1.12mの長方形で、検出面からの深さ42cmを測る。

人骨（頭骨と四肢骨の一部）が出土したが、副葬品等は見られなかった。残存状況が悪く、性別、年齢等は不明である。

（2）土坑（SC１～４、第100図～第102図、第24表）

SC１は、C４区のほぼ中央に検出した。0.86×0.72mのやや小型の長方形で、検出面からの深さ37cmを測る。床面中央に伏せた状態の鉄鍋が出土し、その下から鏡１面、短刀１振、銭２束が出土した。

鉄鍋下の床面には、黄褐色土（焼土か）が見られ、その上には約５cmの厚みで木片と竹片からなる炭化材が見られた。更にその上に、鏡、鉄短刀、銭、炭化した布片が見られたが、骨片等は確認されなかった。

土坑内から骨が確認されていないことから、遺体を埋葬した土壙墓ではなく、何らかの祭祀行為に伴うものと考えられる。

417は鋳造の鉄鍋で、口径48.0cm、底径37.0cm、高さ18.5cm、器厚は0.8cmを測る。口縁はやや外反気味で、底部外面に湯口が見られ、やや外に膨張している。注口や把手、吊り下げ用の孔は見られない。

418の鏡は、鏡面を上にした状態で、鉄鍋から約半分が外側に出た状態で出土した。径は11.68cmで、周縁がL字形に短く立ち上がる。１条の隆起圏線を持ち、その内外に草葉文がすき間無く陽刻されている。径２cmの鈕は低平で、やや簡略化しているが亀を形取ったものである。手擦れのためか頂部が痩せている。鏡面は丁寧に研磨され、光沢を残している。

419の鉄短刀は、現存長29.7cmで、鞘部は木質に革貼り、柄部は木質に布貼り（平絹・漆塗り）で、銅製の馬形の飾り金具を有する。

420～426は銭束で、稲ワラを紐状に縒ったもので結束されている。剥離して確認できるものは全て洪武通寶である。２束が出土し、その枚数は100枚と95枚である。

土坑内に見られた炭化した布片は、織り目の比較的粗い麻の平織物で、数枚を重ねた状態（あるいは数回折り畳んだ状態）であった。特に包まれたものは確認できなかった。

SC２は、C４区中央やや南寄りに検出した。1.77×1.32mの楕円形で、検出面からの深さ23cmを測る。ウシ１頭が埋葬されており、下顎骨、前肢骨、後肢骨が残存していた。各部の骨の位置に乱れは見られず、横臥位で丁寧に埋葬されたものと考えられる。

SC３は、C４区南西隅に検出した。1.08×0.64mの楕円形で、検出面からの深さ15cmを測る。ウマ１頭が埋葬されたものと考えられるが、土坑北壁際に上下の臼歯が咬み合った状態で、東壁際に肢骨の一部が出土したのみである。

SC４は、C４区中央北寄りに検出した。1.60×1.16mの不整長方形で、検出面からの深さ46cmを測る。ウシ１頭が埋葬されており、上下顎骨、前肢骨、後肢骨が出土した。土坑ほぼ中央に寛永通寶２枚

（第101図416）が出土している。

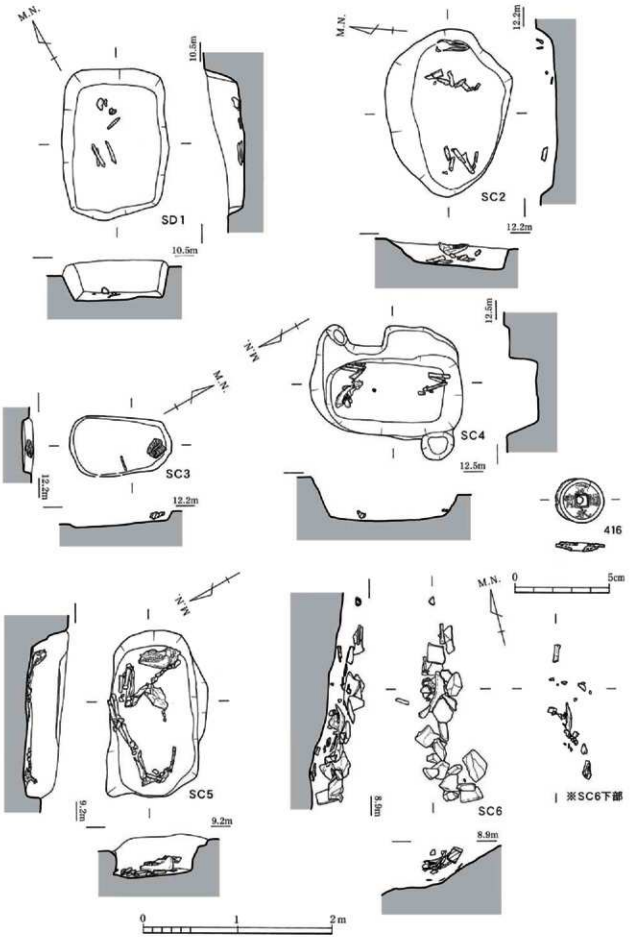
4．C区出土の遺物（第103～105図、第22表～第24表）

427～440はC１区からの出土である。427～429は土師器で、壺・高坏ともに丁寧なミガキが施される。430は平安期の甕である。431・432は坏で、432は内外面ともに黒化処理が施されている。433～437は土師質の小皿で、いずれもヘラ切り底である。438は玉縁口縁の白磁碗である。439は陶器の甕口縁で、外面に茶褐色の鉄釉が施される。440は唐津産の陶器皿で、口縁の４ヶ所を内側に折り曲げ波状縁としている。

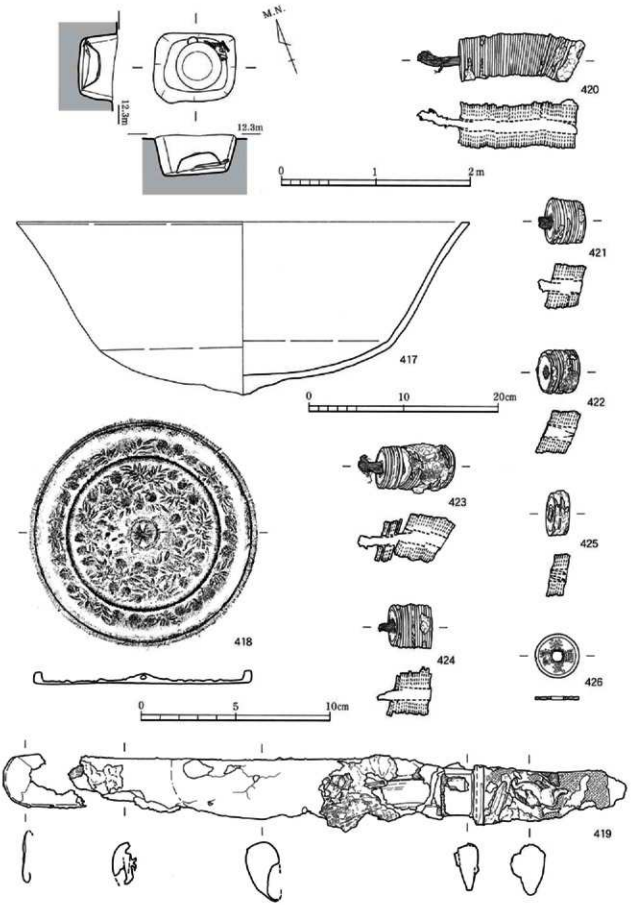
441～459はC２区からの出土である。441～443は土師質の甕である。443は外面に格子目タタキと内面にナデが施される。444・445は須恵質の甕で、外面に平行タタキと内面にハケ目が施される。446～448は土師質の坏である。いずれもヘラ切り底である。449は端反りの白磁碗、450は白磁小碗で、外面にはヘラ状工具による放射状の沈線が施される。451はC２区に検出されたウシの埋葬土坑ＳＣ６から出土した。在地産の無釉の大甕で、口縁部が断面三角形状に肥厚する。焼成が甘く、内外面ともに器壁の剥離が著しい。人為的に打ち欠いて、ウシを埋葬する際に土坑内に敷き詰めたものと考えられる。452も在地産大甕の口縁で、口縁部が内側に肥厚し断面三角形状となる。453・454は陶器碗で、内外面に施された浅黄色のガラス質の釉薬には細かな貫入が見られる。455・456は唐津産の陶器皿で、見込みに４ヶ所の胎土目積みの痕跡が見られる。457は備前焼の壺で、口縁は玉縁形で肩部に３条のヘラ描きを２ヶ所施す。備前焼Ⅲ期に典型的な壺で、蔵骨器として使用されることが多い。458は備前焼の大甕で、赤褐色の鉄釉上に浅黄色の灰釉（自然釉）が斑に付着する。459は大甕の胴部～底部で内外面ともに褐灰色を呈す。

460～469はC３区からの出土である。460・461は土師質の坏と皿で、いずれもヘラ切り底である。462・463は瓦質の鍔付鉢である。内外面ともに黒化している。464は在地産の無釉陶器の大甕である。焼成が甘く、内外面ともに器壁の剥離が著しい。465は輸入青磁の碗である。内外面に除青文が見られる。466は陶器皿で、切り高台である。見込みに４ヶ所の胎土目積みの痕跡が見られる。467・468は備前焼の擂鉢、469は土錘である。

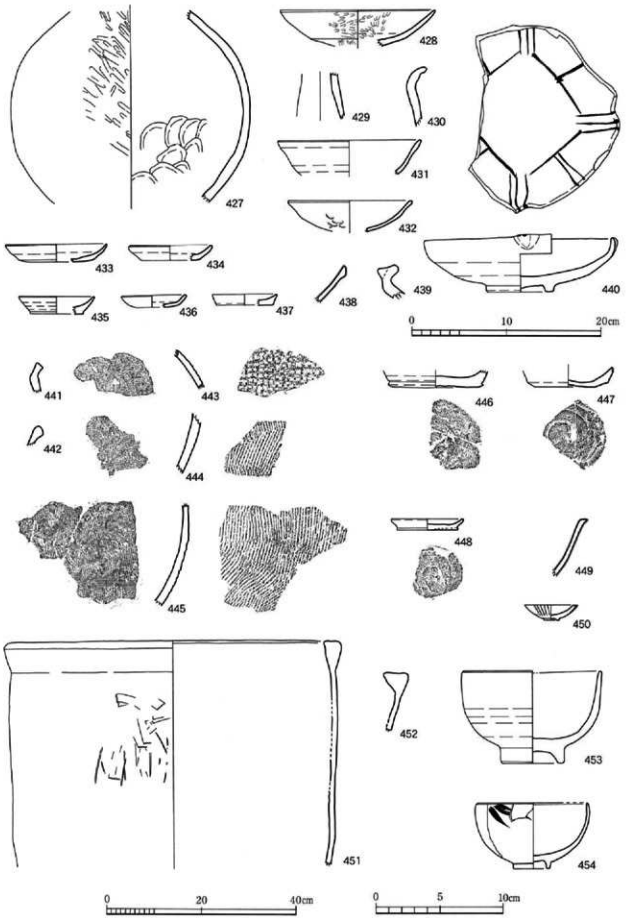
470～488はC４区からの出土である。470は土師質の甕口縁で、内外面ともに丁寧なハケ目調整である。471～473は瓦質土器で、いずれも鉢と思われる。器壁が黒化している。474は輸入青磁碗、475は白磁の瓶である。476・477は染付碗で、476は網状文、477は大振りの花文を施す。478・479は陶器の碗と皿である。479は見込みに蛇の目釉剥ぎと胎土目積みの痕跡が残る。480・481は在地産の無釉大甕の口縁部で、器壁は剥離が著しい。482・483は同一個体と思われる。肩部４ヶ所に粘土紐を貼り付けた四耳壺である。胴部から底部にかけての作りは粗く、数カ所に焼成時の気泡による膨れが見られる。485・486は同一個体の陶器壺で、厚く塗られた灰黄色釉の上から、肩部に濃緑色の釉を施している。487は無釉の陶器鉢で、口縁部を内面に折返し肥厚させている。488は砂岩製の砥石で、表裏面に細かな叩打痕が認められる。



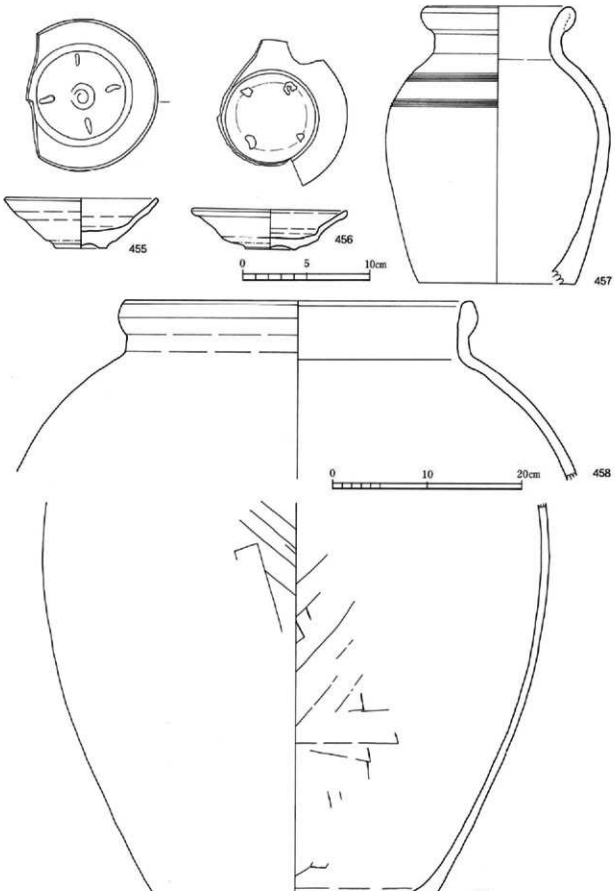
第101図　C区　土壙墓・土坑実測図（1／40）



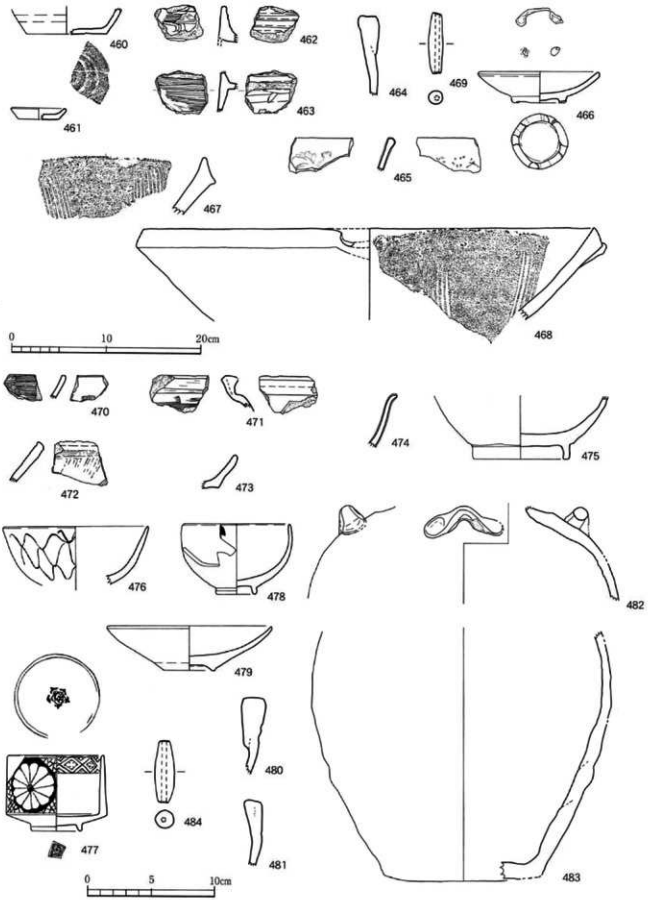
第102図　C4区　SC1及び出土遺物実測図（SC1→1／40，417→1／4，他は1／2）



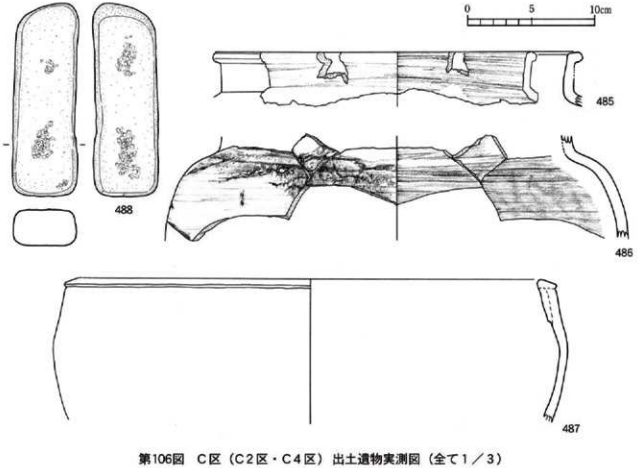
第103図　C区（C1区～C2区）出土遺物実測図
（427～437, 441～448→1／4，451・452→1／8，他は1／3）



第104図　C２区　出土遺物実測図（458・459→１／４，他は１／３）



第105図　C区（C3区～C4区）出土遺物実測図
（460～464, 470～473・480・481→1／4，他は1／3）



第106図　C区（C2区・C4区）出土遺物実測図（全て1／3）

遺物番号	種別	器種部位	出土地区	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
427	土師器	壺 胴部	C1					工ガキのあとナデ　ナデ 風化気味	横・斜方向ナデ　指頭痕	明赤褐	明黄褐	2mm以下の白色・赤褐色の粒 2mm以下の雲母の粒	
428	土師器	高坏 口縁～体部	C1		(16.4)			横・斜方向ミガキの後ナデ	縦・横・斜方向ミガキの後ナデ	明赤褐	にぶい橙	1mm以下の橙色・黒褐色の粒 微細な光沢粒	
429	土師器	高坏 脚部	C1					ナデ	粗いナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の橙色・黒色・白色の粒	
430	土師器	壺 口縁	C1					雑変　横ナデ	雑変　横ナデ ナデのあと工具痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の黒色の粒 1mm以下の白色・微細な光沢粒	
431	土師器	坏 口縁～体部	C1		(7.4)			横ナデ	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	3mm以下の黒褐色の砂粒	
432	土師器	坏 口縁～体部	C1		(16.53)			横ナデ　指頭痕　ナデ	横ナデ	黒褐色	黒褐色	4.5mm以下の灰白色の砂粒	黒色
433	土師器	鉢 口縁～底部	C1	P14	(10.4)	(6.0)	1.85	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙 褐灰	明黄褐 褐灰	1mm以下の灰褐色の粒	
434	土師器	鉢 口縁～底部	C1			(6.5)		回転ナデ　ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の褐色の粒 微細な光沢粒	
435	土師器	鉢 口縁～底部	C1			(5.6)		回転ナデ　ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1.5mm以下の黒褐の粒 微細な光沢粒	
436	土師器	鉢 口縁～底部	C1		(7.3)			横・斜方向のナデ　ナデ	横・斜方向のナデ　ナデ	灰・灰黄	灰	1.5mm以下の黒褐の粒	瓦質?
437	土師器	鉢 口縁～底部	C1			(6.0)		ナデ	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	2mm以下の褐灰の粒 微細な光沢粒	
438	白磁	碗 口縁～体部	C1					玉縁口縁　施釉	施釉	灰白	灰白		
439	陶器	壺 口縁	C1					横ナデ　施釉	横ナデ	にぶい赤褐	橙	2.5mm以下の灰白色・灰褐色・赤褐色の砂粒	
440	陶器	鉢 口縁～底部	C1		(14.4)	5.2	4.6	施釉　体部の一部と高台内側無	施釉	灰	灰黄		唐津
441	土師器	壺 口縁	C2	SB1				横ナデ　黒変	横ナデ　ナデ　黒変	橙・黄灰	黄灰	2mm以下の黒白色・灰黄色・黒褐色の粒	
442	土師器	鉢 口縁	C2					ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	1mm以下の褐黄色・褐色の粒 微細な光沢粒	
443	土師器	甕 胴部	C2	SB1				格子目タタキ	ハケ目	明赤褐	橙	2mm以下の赤褐・にぶい黄橙の粒 1mm以下の灰白・褐黄色光沢粒	
444	須恵器	壺 胴部	C2	SE1				平行タタキ	縦・横方向のハケ目 指頭痕	黒色	褐灰	4mm以下の灰白色・茶褐色の砂粒 微細な光沢粒	
445	須恵器	壺 胴部	C2	SE1				平行タタキ	縦・横方向のハケ目 指頭痕	黒色	褐灰	2mm以下の白灰色・灰褐色の砂粒 微細な光沢粒	
446	土師器	坏 底部	C2	SE1				回転ナデ　ヘラ切り 風化気味	回転ナデ　風化気味	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の赤褐の粒 1mm以下の黒褐の粒	
447	土師器	坏 底部	C2			(8.6)		ナデ　ヘラ切り	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の黒褐色の砂粒 0.5mm以下の茶褐色の砂粒	

第22表　C区出土遺物観察表1

遺物番号	種別	器種	部位	出土地区	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
448	土師質	鍋 口縁～底部	C2	521		(7.5)	(6.4)		回転ナデの後にヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の黒鳴色・灰鳴色・鳥鳴色の砂粒　微雲母光沢粒	
449	白磁	碗 口縁～体部	C2						端反り　施釉	施釉　口縁下部に蓮文による圧痕	灰白	灰白		
450	白磁	小碗 口縁～底部	C2				(7.0)		施釉　露胎　指射状の圧痕	施釉	灰白	灰白		
451	陶器	大壺 口縁～胴部	C2	506		(71.6)			ナデ　横ナデ　縦・斜方向のナデ　工具痕　風化気味	スス付着による黒変　風化著しい	明赤褐 にぶい黄橙	橙 にぶい黄橙	2mm以下の橙・褐・赤褐の粒 1mm以下の黒色・透明の光沢粒	
452	陶器	大壺 口縁	C2	521					ナデ　縦ナデ	縦ナデ　スス付着	橙・浅黄	橙・にぶい黄	2mm以下の暗赤褐の粒 1mm以下の黒色・透明光沢粒	
453	陶器	鍋 口縁～底部	C2		11	9.03	7.94		施釉貫入　削付調整	施釉貫入	浅黄	浅黄		
454	陶器	鍋 口縁～底部	C2			(8.85)	2.99	5.2	口縁下部に帯状文　施釉貫入　底部露胎	施釉　貫入	浅黄	浅黄		
455	陶器	鉢 口縁～底部	C2	581		(11.8)	(4.1)	(4.0)	灰釉　回転ナデ　体下部露胎　回転ナデの後削り　ナデ	灰釉　粘土目積み	にぶい黄	にぶい黄橙		指摘
456	陶器	鉢 口縁～底部	C2	581		(12.40)	(4.6)	(3.1)	灰釉　回転ナデ　ナデ　ナデの後削り　体下部露胎	灰釉　回転ナデ　粘土目積み	にぶい黄	浅黄		指摘
457	陶器	壺 口縁～底部	C2			(11.6)	(12.8)		折り返し玉縁口縁　回転ナデ　自然釉　肩部に刻み目	回転ナデ　自然釉	灰	暗灰	2mm以下の灰白色・黒鳴色の砂粒	備前
458	陶器	大壺 口縁～胴部	C2			(36.4)			自然釉　回転ナデ	横ナデ	灰褐・赤黄 にぶい赤褐	にぶい赤褐		備前
459	陶器	大壺 胴部～底部	C2				(29.2)		横・縦ナデ　斜方向の工具によるナデ	ナデ　工具によるナデ	褐灰	褐灰		
460	土師質	坏 底部	C3				(8.6)		回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙・橙	浅黄橙	2mm以下の灰色・褐灰の粒	
461	土師質	鍋 口縁～底部	C3					1.2	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	灰白	灰白	2mm以下の灰白の粒 1mm以下の赤褐の粒	
462	瓦質	鉢 口縁部	C3						ナデ　横方向の浅い沈線文	横ハケ目の後ナデ　横ナデ	褐灰	暗灰	2mm以下の黒褐色・褐色の粒	搬付鉢
463	瓦質	鉢 胴部	C3						丁寧なナデ　突帯　削り　黒変	横ハケ目　黒変	橙・黒	にぶい黄橙 オリーブ黒	2mm以下の白色・淡黄色・褐色の粒	搬付鉢
464	陶器	大壺 口縁	C3						ナデ　横ナデ	ナデ 横・斜方向ナデ	浅黄	浅黄	2mm以下の灰白色・灰白の光沢粒 1.5mm以下の鳥灰の粒	
465	青磁	碗 口縁～体部	C3						施釉　蛇文	施釉　蛇文	灰オリーブ	灰白		
466	陶器	鍋 口縁～底部	C3			9.4	4.4		施釉貫入　体下部から底部露胎　切り高台	施釉貫入　目積痕	灰白	浅黄		指摘
467	陶器	鉢 口縁～胴部	C3						回転ナデ	回転ナデの後縦方向に5条の櫛目	灰黄褐・褐灰	褐灰	2mm以下の褐色の粒 2mm以下の黒色・白色の粒	備前
468	陶器	鉢 口縁～胴部	C3						回転ナデ	回転ナデの後縦方向に5条（以上）の櫛目	にぶい黄橙 灰褐	にぶい黄橙 灰褐	2mm～3mm以下の白色・赤褐色の粒 微細な雲母透明の光沢粒	備前
469	土師質	土鍋	C3			長6.65	幅1.2	重5.8g						
470	土師質	甕 口縁	C4						横ナデ　縦ハケ目　スス付着	横ハケ目	にぶい黄	浅黄	1.5mm以下の褐色の粒	
471	瓦質	鉢 口縁～胴部	C4						ナデ	横ナデ　ハケ目	オリーブ黒	オリーブ黒	1.5mm以下の灰白の粒 1.5mm以下の灰白・透明光沢粒	
472	瓦質	鉢 口縁	C4						横ナデ　横方向のハケ目　ナデ　風化著しい	風化著しい	灰	灰	1mm以下の白褐色の粒	
473	瓦質	鉢 口縁～底部	C4						ナデ　ヘラ切り	ナデ	灰黄	浅黄	1mm以下の褐・黒褐・灰白・灰の粒	
474	青磁	碗 口縁～体部	C4						端反り　施釉	施釉	灰オリーブ	灰黄		
475	白磁	碗 胴部～底部	C4				7.5		施釉　削付釉剥ぎ	露胎　回転ナデ	明緑灰	浅黄		
476	染付	碗 口縁～体部	C4			(11.4)			施釉	施釉	灰白	灰白		
477	染付	碗 口縁～底部	C4			(7.4)	(3.8)	(6.0)	施釉　削付釉剥ぎ	施釉 見込みにコンニャク印	明緑灰	灰白		
478	陶器	碗 口縁～底部	C4			(8.4)	(3.6)	(5.55)	施釉　貫入　底部露胎	施釉　貫入	浅黄	浅黄		
479	陶器	鉢 口縁～底部	C4			(13.6)	(4.0)	(3.5)	施釉　体下部から底部露胎　回転ナデ　ナデ	施釉 粘土目と見込み痕跡ガ	灰オリーブ	にぶい褐		
480	陶器	大壺 口縁	C4						ナデ　沈線　風化著しい	風化著しい　ナデ	灰	灰	5mm前後の灰白の粒 2mm以下の黒褐・灰白の粒 1mm以下の黒色・透明光沢粒	
481	陶器	鉢 口縁	C4						沈線　ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1～2.5mm以下の白・褐灰色の粒 0.5～1mm以下の鳥褐色の粒	
482	陶器	壺 胴部～体部	C4						自然釉	ナデ	にぶい黄 黄褐	にぶい黄橙	2mm以下の黒褐・褐灰の粒	483と同一
483	陶器	壺 体部～底部	C4				(11.40)		自然釉	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の黒褐・褐灰の粒	482と同一
484	土師質	土鍋	C4			長4.95	幅1.5	重9.9g						
485	陶器	壺 口縁～胴部	C4			(29.4)			施釉	施釉	灰白・灰黄 オリーブ	褐灰黄		486と同一
486	陶器	壺 胴部～胴部	C4						施釉	施釉	灰黄・褐 オリーブ灰	にぶい黄橙		485と同一
487	陶器	鉢 口縁～体部	C4			(20.9)			ナデ　斜方向のナデの後横ナデ	板状工具による斜方向のナデの後横ナデ	褐灰	褐灰黄	2mm～3mm大の灰白の粒 2mm以下の灰白・褐灰の粒	

第23表　C区出土遺物観察表２

遺物番号	器種	調査区	出土地点	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
416	寛永通宝	C 4	SC4	—				4.40	2枚
417	鉄鏃	C 4	SC1	—	高さ18.5	口径48.0	0.80		
418	銅鏡	C 4	SC1	—	11.68		5.50	198.7	
419	鉄刀刀	C 4	SC1	—	29.70	3.95	1.80	170.6	鞘部：木質に革貼り、柄部：木質に布貼り
420	洪武通宝	C 4	SC1	—				107.4	銭束、48枚、稲ワラを継状に縒ったもので結束
421	洪武通宝	C 4	SC1	—				30.3	銭束、12枚、稲ワラを継状に縒ったもので結束
422	洪武通宝	C 4	SC1	—				25.4	銭束、12枚
423	洪武通宝	C 4	SC1	—				54	銭束、17枚、稲ワラを継状に縒ったもので結束
424	洪武通宝	C 4	SC1	—				34.9	銭束、16枚
425	洪武通宝	C 4	SC1	—				15.7	銭束、7枚
426	洪武通宝	C 4	SC1	—	2.35		0.2	1.7	
488	砥石	C 2	SH16	砂岩	2.35	4.5	2.8	456.2	表裏2面に敲打痕

第24表　C区出土遺物計測表

綱	目	科	和名	重量（g）	備考	生息地
二枚貝綱	マルスダレガイ目	マルスダレガイ科	アサリ	18,900		内湾の潮間帯から水深10mの砂泥底
			ハマグリ	66,460		内湾の潮間帯や浅海の砂泥地
			オキシジミガイ	13,730		内湾奥部の潮間帯の砂泥に多い
			シオヤガイ	44		内湾奥部の潮間帯の泥底に多い
		バカガイ科	シオフキガイ	14,370		内湾の潮間帯の砂泥底
		リュウキュウマスオガイ科	イソシジミガイ	66		潮間帯の砂や泥の内湾
		イワホリガイ科	シオツガイ	2	1個体	潮間帯の泥質に穴を あける
		シジミ科	マシジミ or ヤマトシジミ	1,650		マシジミ（河川）、ヤマト～（河口・海の汽水域）
	フネガイ目	フネガイ科	サトウガイ	50		水深19～30mの砂砂底
	イガイ目	イガイ科	ムラサキインコガイ	30		岩礁
	カキ目	イタヤガイ科	イタヤガイ	2	約1/2個体	水深20～50mの砂砂底
		イタボガキ科	カキ（細分出来ず）	2,300		岩礁
			マガキ?	5		潮間帯岩礁底
			淡水の貝?	4	2個体	
			不明	2	2個体	
			破片（二枚貝）	22,350		
腹足綱（巻貝）	原始腹足目	リュウテンサザエ科	サザエ	2,441	うち、蓋202g	潮間帯下の岩礁底
			スガイ	280		潮間帯の岩礁底
			ウラウズガイ	3	1個体	潮間帯の岩礁底
		ニシキウズガイ科	ダンベイキサゴ	300		浅海の砂底
			コシダカガンガラ	160		潮間帯の岩礁底
			バテイラ	42		潮間帯の岩礁底
			イシダタミガイ	64		潮間帯の岩礁底
			クマノコガイ	85		潮間帯の岩礁底
			クボガイ	310		太平洋側の潮間帯の岩礁底
			イボキサゴ	2	1個体	潮間帯の砂底
		アマオブネガイ科	アマオブネガイ	4	1個体	潮間帯岩礁底
		フジツガイ科	ボウシュウボラ?	63	1個体	潮間帯より水深20mの砂泥底
	中腹足目	クニナ科	イボウミニナ	1,980		潮間帯の砂泥底
			フトヘナタリガイ	37		湾奥の潮間帯の小石や泥地、アシの生えた間
			カワアイガイ	15		汽水域の潮間帯の砂泥底やアジモ帯の砂泥底
		トゲカワニナ科	タケノコカワニナ	360		多少海水の混じる河口や湾
		カワニナ科	カワニナ	352	淡水	砂や小石底
		タニシ科	マルタニシ	160	淡水	田や沼、溝
		ヤマタニシ科	ヤマタニシ	8	陸貝	山林の落ち葉の間
	新腹足目	アクキガイ科	アカニシ	246		内海の潮間帯より水深20mの砂泥底
			レイシガイ	556		潮間帯の岩礁底
			イボニシ	58		潮間帯の岩礁底
			オニサザエ（幼）	16	3個体	潮間帯付近の岩礁底
	柄腹目	ニッポンマイマイ科	コベソマイマイ	8	陸貝	
			巻貝破片	180		
不明			焼けた貝	30		
			不明	28		
合計				139,155		

放部忠重ほか　1996「貝」エコロジー自然シリーズ　保育社を参照

第25表　C2区　SZ1出土貝種一覧

第Ⅵ章　D区の調査

D区は、C区と同じく市立伊形小学校が立地する独立丘陵の南向き斜面及び裾部に位置する。丘陵斜面は、数段のテラス状に整形され、畑地として利用されていた。調査の進行にあわせ、裾部から順にD1区、D2区とし、D13区までを調査した。

D1区～D3区にかけて、旧石器時代から縄文時代、古墳時代、中世～近世の遺構と遺物が検出された。またD4区～D13区については、表土剥ぎと精査を行ったが、特に明確な遺構は検出されなかった。

なお、D1区で確認された旧石器時代から縄文時代早期の遺構や遺物については、前章にて報告しているため、ここでは古墳時代・中近世の遺構や遺物について述べていきたい。

第1節　古墳時代・中近世の遺構と遺物

1．D1区（第107図）

D1区は、丘陵裾部で、60×40mとD区の中では最も広い調査区である。古墳時代の竪穴住居跡、掘立柱建物、溝状遺構、ピット群が検出された。

（1）竪穴住居跡（SA1～5、第107図・第109図～第111図、第27表～第28表）

SA1は、D1区南端に検出された。4.75×3.45mの長方形プランで、検出面からの深さ35cmを測る。上屋構造を支持する柱穴は、6基と考えられるが、南東隅の柱穴は検出できなかった。床面中央に約10cmの深さの浅い皿状の落ち込みが見られたが、特に炭化物や焼土は確認されなかった。床面からやや浮いた状態で多くの土師器が出土した。

489・490・493は甕で、底部は木の葉底である。494～496は壺形土器である。494は小型丸底壺で、二重口縁と算盤玉状に明瞭な稜を持つ胴部が特徴的である。最大径は胴下部にある。491・492・497～512は高坏である。坏部口縁は、外反するもの、やや丸みを持って立ち上がるもの、屈曲部から内傾するものが見られる。脚部はいずれも短脚で、「ハ」字形に開くもの、やや膨らみを持つもの、円柱状で中膨れするものが見られる。513～518は鉢および椀である。調整にはミガキは見られず、全体に丁寧なナデで仕上げられている。519は須恵器壺で、肩部に2条の沈線と櫛描波状文が施される。内器面には指押さえの痕が顕著である。

SA2は、SA1の東側約3mの位置に検出された。3.75×3.50mの方形プランで、検出面からの深さ25cmを測る。柱穴は4基で、床面中央やや東寄りに不整形の浅い落ち込み（約5cm）が見られたが、特に炭化物や焼土は確認されなかった。床面からやや浮いた状態で多くの土師器が出土した。

520～527は甕形土器である。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反するもの、直線的に延びるものが見られるが、全体の器形的に口縁径と胴部最大径がほど等しくなるものが多い。528～535は壺形土器である。528は全体に薄手の作りで、「く」字形に屈曲する頸部に短い口縁部を持ち、張りの強い胴部にはハケ目が施される。529は倒卵形の胴部に小さな平底を持つ壺で、器壁は全体に風化が著しいがミガキと丁寧なナデが見られる。530・531はやや小振りの壺で、530は胴部中央に稜を持つ算盤玉形となる。531はやや扁平気味の球胴で、全体に丁寧なミガキが施される。532～535は二重口縁壺の口縁部である。538・539は甕あるいは壺の底部で、538が小さな平底であるのに対し、539はやや厚く外に張

り出すものの丸底を意識したものと思われる。540～544は高坏で、540と541は同一個体である。口縁が直線的に延び深みのある坏部である540に対し、542は坏下部が平坦で口縁部は外反しながら広がる。544はエンタシス状に膨らみを持つ短脚の高坏脚部である。545は手づくね成形の小型鉢である。

ＳＡ３は、Ｄ１区南東に検出された。プランの約半分は調査区外で、既に削平を受けていた。検出されたのは4.45×3.40mであるが、本来は方形プランであったと考えられる。検出面からの深さは30cmを測る。床面に主要な柱穴は検出されなかったが、壁際に10基の小ピットが確認された。上屋構造あるいは壁構造を支持するための補助的な柱穴と推定される。床面から浮いた状態で土師器が出土した。

546・547は甕形土器で、直線的に延びる口縁部と、粘土の輪積み痕が明瞭に残る胴部片である。548は小型壺であるが、器壁は全体に厚く、底部は平底気味である。549の高坏は、坏部に明瞭な段を有する。

ＳＡ４は、調査区中央やや南東よりに検出された。掘立柱建物（ＳＢ１）と重複している。5.30×4.30mの長方形プランで、検出面からの深さ35cmを測る。上屋構造を支持する主要な柱穴は、プラン長軸線上の２基と考えられるが、その他に10基程度のピットが検出されており、これらの中に補助的な柱となるものも含まれる可能性がある。床面からやや浮いた状態で土師器が出土している。

550は甕口縁、551・552は壺形土器である。553・554は高坏で、553は細身の脚部に平坦な坏下部が付き、調整はハケ目が顕著である。554は短脚の高坏脚部である。579は砂岩製の磨石で、両端部に敲打痕が明瞭に残る。

ＳＡ５は、調査区北西部に検出された。4.70×4.30mの略方形プランで、検出面からの深さ25cmであるが、東側は床面付近まで攪乱されており、東壁の立ち上がりは確認できなかった。床面上に14基の大小のピットを検出したが、その配置からはいずれが主要な柱穴であるか判断できなかった。床面から浮いた状態で土師器が出土している。

556は小型壺の口縁である。557～560は高坏で、坏部は口縁が直線的に長く延び深みがある。脚部は短脚でやや太い。580は砂岩製の砥石である。

（２）掘立柱建物（ＳＢ１～３、第107図）

ＳＢ１は、調査区南西部に検出された。２×３間で、棟方向は東西（Ｎ－74°－Ｗ）である。梁行4.30m、桁行6.40mを測る。

ＳＢ２は、調査区中央に検出され、南東隅部はＳＡ４に重複している。２×６間で、南北両面に庇を有する。棟方向は東西（Ｎ－88°－Ｗ）である。梁行4.00m、桁行13.50mを測る。

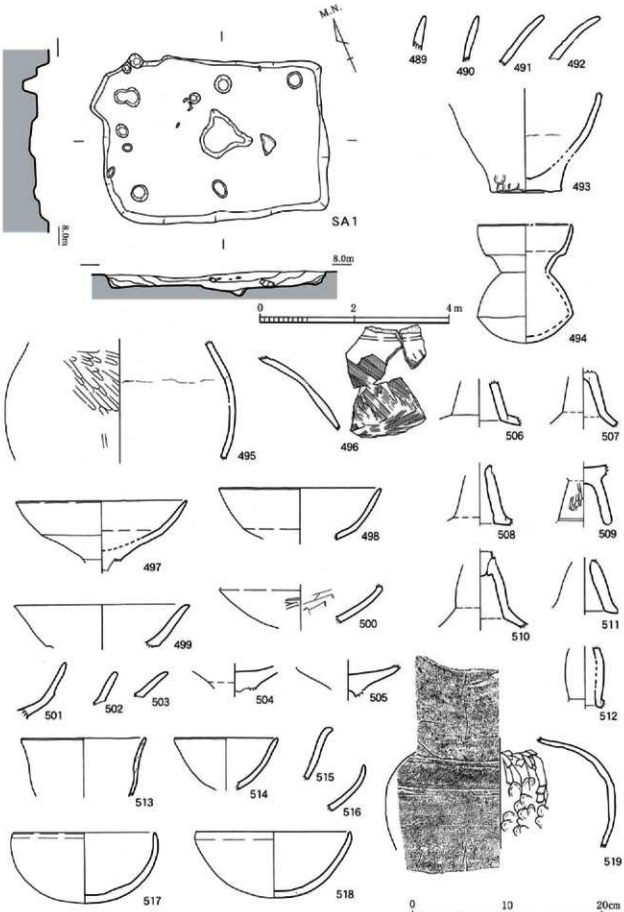
ＳＢ３は、調査区北東部に検出された。２×４間で、棟方向は南北（Ｎ－23°－Ｅ）である。梁行4.00m、桁行7.80mを測る。

（３）溝状遺構（ＳＥ１、第107図）

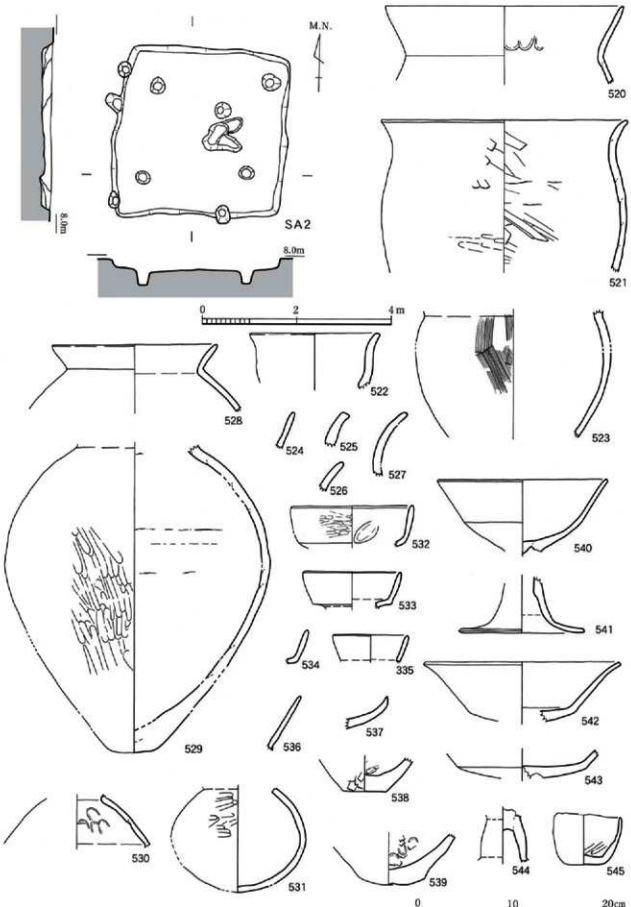
ＳＥ１は、調査区南西隅に、23mの長さで検出された。幅は2.30～3.00m、深さ0.80～1.00mを測る。溝底付近には幅約80cmの帯状に石の集積が見られた。また、埋土中位と上位に硬化面が見られた。掘削当初は水路として使用されたものが、後に通路として使用されたものと推定される。埋土中から、陶磁器片、古銭等が出土した。また、鉄滓も多く混入しており、周辺で鍛冶が行われていた可能性が指摘される。

第107図　D1区　遺構分布図（1／250）

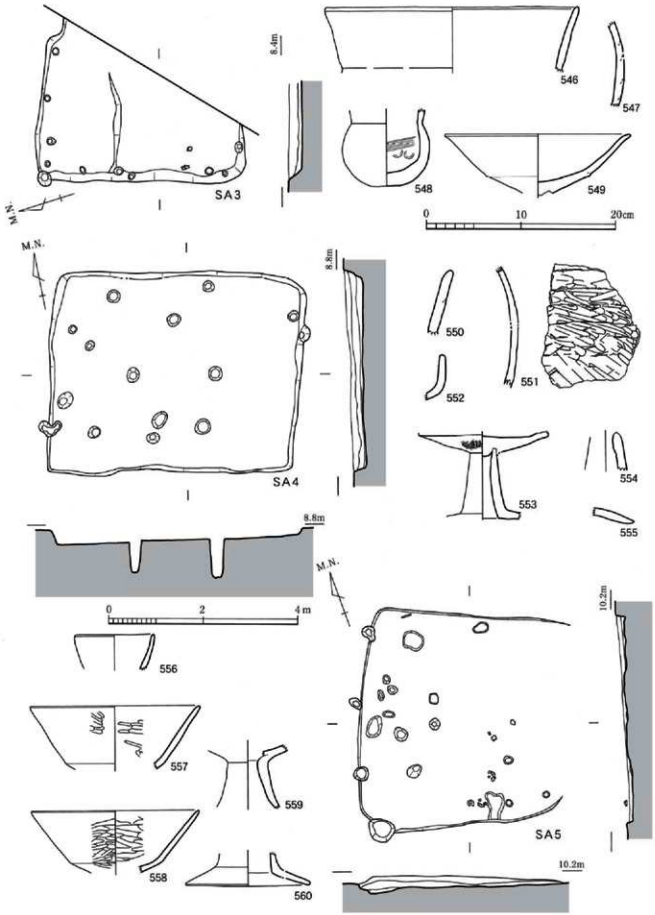
第108図　D２区，D３区　遺構分布図（１／250）



第109図　D1区　SA1及び出土遺物実測図（SA1→1／80，遺物→1／4）



第110図　D1区　SA2及び出土遺物実測図（SA2→1／80，遺物→1／4）



第111図　D1区　SA3，SA4，SA5及び出土遺物実測図
（SA3，SA4，SA5→1／80，遺物→1／4）

2．D２区（第108図）

D２区は、D１区の北側で約1.5mの段差を持つテラス面である。掘立柱建物、土坑、性格不明の大型の掘り込み、ピット群を検出した。

（1）掘立柱建物（SB４～５、第108図）

SB４は、D２区東部に検出された。２×３間で、棟方向は南北（N－15°－E）である。梁行4.80m、桁行5.80mを測る。

SB５は、D２区中央やや西寄りに検出された。１×２間で、棟方向は東西（N－62°－W）である。梁行2.40m、桁行4.90mを測る。

SB６は、SB５の西側約２mの位置に検出された。２×２間で、棟方向は東西（N－64°－W）である。梁行3.50m、桁行4.30mを測る。

SB７は、D２区北西に検出された。２×６間で、棟方向は東西（N－65°－W）である。梁行4.00m、桁行11.50mを測る。

SB８は、SB７に重複するように検出された。２×４間で、棟方向は東西（N－65°－W）である。梁行5.00m、桁行9.00mを測る。

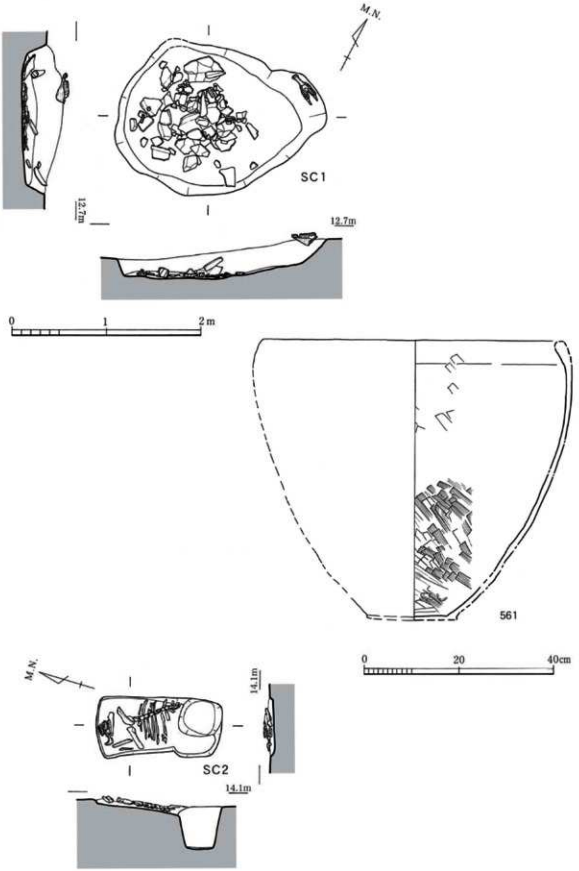
（2）土坑（SC１、第108図・第112図、第28表）

SC１は、D２区中央南端に検出された。2.24×1.62mの楕円形で、検出面からの深さ30cmを測る。大型陶器を破砕し、破片を床に敷いた上に、ウマ１頭が埋葬されていた。土坑北端に下顎が見られた。胴部骨や四肢骨の残存状態は悪かったが、部分的に残る肢骨の状況から背を東にした横臥位で埋葬されたものと推定される。

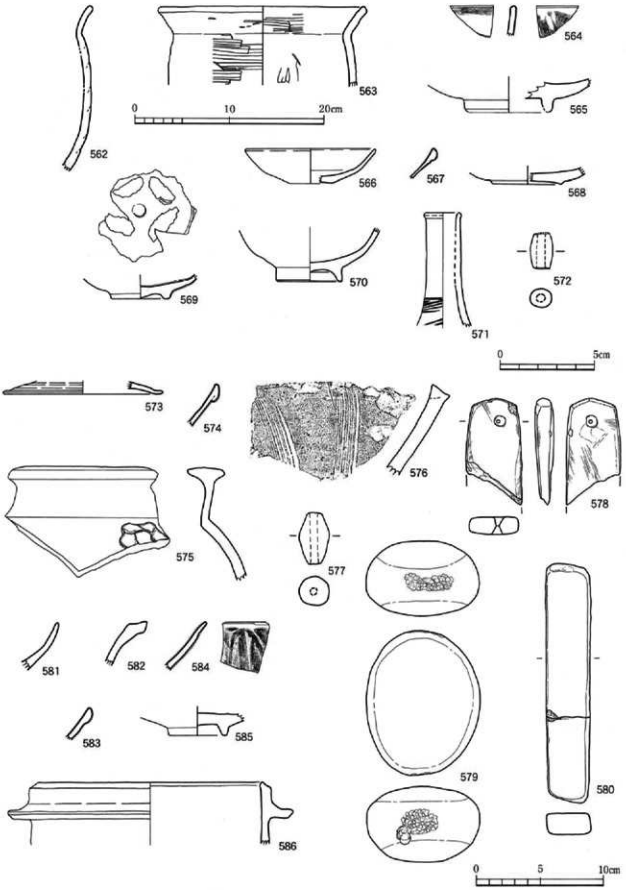
561は在地産の無釉陶器の大甕である。僅かに内湾する口縁部は肥厚するものの、体部から底部まで全体に薄手の作りである。

（3）性格不明の大型掘り込み（SZ１、第108図）

SZ１は、D２区中央に検出された。6.50×3.50mの不整長方形で、深さは50cmを測る。埋土は、褐色土や暗褐色土、黒褐色土の混土で、一気に埋め戻されている。床面から約30cm浮いた状態で、ウマの趾骨片が出土したが、C区やD区で検出されたウシやウマの埋葬土坑とは状況が大きく異なる。埋め戻し時に混入したものではないかと考えられる。



第112図　D2区SC1・D3区SC2及び出土遺物実測図
(SC1, SC2→1／40, 遺物→1／8)



第113図　D区　遺構外出土遺物実測図
（562・563・573・586→1／4，578→1／2，他は1／3）

3．D３区（第108図）

D３区は、D２区の更に上段のテラス面である。掘立柱建物、土坑、溝状遺構、ピット群が検出された。

（1）掘立柱建物（SB９～13、第108図）

SB９は、D３区東端に検出された。２×３間で、棟方向は東西（N－77°－W）である。梁行3.50m、桁行3.80mを測る。

SB10は、D３区中央やや東寄りに検出された。周囲に多数見られたピットよりも一回り大きな径70～90cmの柱穴で構成されることから容易に峻別されたが、建物南東部にあたる部分が大きく攪乱されていたため、数基の柱穴が見られなかった。本来は４×４間の大型の建物であったと推定される。棟方向は東西（N－73°－W）で、梁行9.30m、桁行10.50mを測る。

SB11は、D３区中央やや西寄りに検出された。２×４間で、棟方向は南北（N－22°－E）である。梁行5.80m、桁行6.40mを測る。

SB12は、SB11に重複して検出された。２×３間で、棟方向は東西（N－65°－W）である。梁行4.40m、桁行6.00mを測る。

SB13は、D３区西端に検出された。２×２間で、棟方向は南北（N－24°－E）である。梁行3.90m、桁行6.50mを測る。

（2）土坑（SC２、第108図・第109図）

SC２は、D３区中央南端に検出した。1.32×0.66mの長方形で、検出面からの深さは僅かに10cmである。ウマ１頭が、頭部を北に、背を東にして横臥位で埋葬されていた。検出時は下顎骨と胴部骨が見られ、検出状況の実測を行ったが、遺存状態が非常に悪く、胴部骨は粉々に砕けた状況であり、下顎骨と臼歯のみしか取り上げることはできなかった。

（3）溝状遺構（SE、第108図）

D３区では、調査区東端と中央に、それぞれ南北方向に延びる溝状遺構を検出した。幅は1.5～２m、深さ30～50cmである。これら２条の溝は、大型建物SB10の東西両側に位置しており、屋敷地の区画を意図したものと推定される。

D３区西半部に見られた東西方向や南北方向の溝は、５～10cmと非常に浅く、周囲のピット埋土が暗褐色土や黒褐色土であるのに対して暗灰色を呈しており、非常に新しい時期のものという印象を受けた。調査前まで行われていた畑耕作に伴う掘削痕と考えられる。

4．遺構外出土の遺物（第113図、第28表・第29表）

562～572はD１区から出土した。562・563は土師器の甕で、562は胴部に縦方向の粗いケズリが顕著で、563は横方向のハケ目が目立つ。564・565は青磁碗である。564は外面及び口縁部内面の８mm程に灰オリーブ色の釉が施されるが、それ以下の内面には一次焼成時の白色釉が薄く見られるのみである。566～568は白磁である。566は無高台の皿で、SA２から出土したものの同遺構の出土遺物が全て古墳

時代の所産であることから、後世の攪乱により混入したものと判断される。567は玉縁口縁の碗、568は断面形三角の小さな高台を持つ皿で、その形態的特徴から朝鮮系白磁の可能性が指摘される。569～571は陶器である。569は唐津の碗で、見込みに４ヶ所の胎土目積みの痕が残る。570は内外面の全面に施釉した後に高台畳付のみ釉剥ぎしている。571は瓶の口縁で、頸部から口縁に鉄釉、体部に灰オリーブ色の釉と塗り分けている。

573～577はＤ２区から出土した。573は須恵器の蓋で、口縁部は屈曲して外側に延び「かえり」を持たない。焼成は甘く、器壁は風化気味である。574は玉縁口縁の白磁碗である。575は在地産の甕である。口縁部は「Ｔ」字形に内外に張りだし、鉄釉の施された外器面には肩部に梅花形の粘土紐の貼付が見られる。576は備前の擂鉢で、口縁部は僅かに外に張り出す程度で強い肥厚や口縁帯の成形は見られない。578は頁岩製の砥石で、隅に両面からの穿孔が見られ、紐を通して携帯したものと考えられる。

581～586は表採など出土地点が明確でない遺物である。581は土師器の坏で、口縁は内湾し、器面にはミガキが明瞭である。582は土師質の鉢で、外傾する口縁の端部は外に折り返される。583は玉縁口縁の白磁碗である。584は青磁碗で、体部には鎬蓮弁の陰刻が見られる。585は国産青磁碗で、見込みに蛇の目釉剥ぎが見られる。586は土師質の鍔付き鉢（羽釜）である。比較的粒子の揃った胎土で、僅かに石英等の混入物が見られる。器壁は黒変し硬質である。

遺物番号	種別	遺構名	出土地区	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
489	土師器	甕 口縁	D1	SA1				ナデ 横ナデ スス付着	横ナデ	にぶい橙	橙	2mm以下の礫の粒。5mm以下のにぶい橙の粒。1.5mm以下の黒色の粒	
490	土師器	甕 口縁	D1	SA1				横ナデ スス付着 横・斜方向のナデ	横・斜方向のナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	2mm以下の赤褐色・浅黄橙色・灰白色の粒。1mm以下の明褐色の粒	
491	土師器	高坏 坏上部	D1	SA1				横ナデ スス付着	ナデ	橙	にぶい橙	5mm以下の赤褐色・灰色の粒	
492	土師器	高坏 坏上部	D1	SA1				横ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙 にぶい橙	2mm以下の黒褐色の粒。2mm以下の赤褐色の粒。2mm以下の灰白色・黒色の粒。微細な金色の粒	
493	土師器	甕 胴部～底部	D1	SA1				縦方向の粗いナデ ナデ 指頭痕 木の葉痕 黒変	粗いナデ ナデ	黒褐・橙	橙 にぶい黄橙	2mm以下の褐色の粒。6mm以下の赤褐色の小石。2mm以下の灰白色・黒色の粒。微細な透明の光沢粒	
494	土師器	壺 口縁～底部	D1	SA1	9.8		12.45	ナデ ミガキ	ナデ	にぶい橙	橙	2mm以下の灰白・灰・褐の粒。5mm褐色の黒色・透明光沢粒	
495	土師器	壺 胴部	D1	SA1				ミガキ	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	にぶい黄橙 暗灰黄	5mm以下の灰褐色・赤褐色の粒。6mm以下の白色の粒。3mm以下の黒色光沢の粒	
496	土師器	壺 胴部～胴部	D1	SA1				横ハケ目 横・縦・斜方向のハケ目 黒変	ナデ 横・斜方向の粗いナデ	にぶい黄橙 黄灰	にぶい黄橙	5.5mm以下の黒褐色の粒。1mm以下の灰白色の粒。微細な透明光沢粒	
497	土師器	高坏 坏部	D1	SA1	(18.0)			横ナデ 黒変	横ナデ	橙	にぶい橙 にぶい黄橙	1～3mm大の赤褐色・浅黄橙の粒。0.5～3mm大の赤褐色・灰白色の粒	
498	土師器	高坏 坏上部	D1	SA1	(16.5)			丁寧なナデ	丁寧なナデ	橙	橙	1～6.5mm大のにぶい赤褐色の粒。1～2.5mm大のにぶい白・にぶい黄橙の粒。2.5mm大の黒褐色の粒	
499	土師器	高坏 坏上部	D1	SA1	(18.6)			丁寧な横ナデ 横ナデ	丁寧な横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の灰白色・赤褐色の粒。微細な黄色粒・純度粒	
500	土師器	高坏 坏部	D1	SA1+SA2				ミガキ スス付着 黒変	ナデ	にぶい橙 橙	にぶい橙 橙	微細～5mm大の灰白色・褐灰・にぶい赤褐の粒。微細～1mm大の無色透明・黒色光沢粒	
501	土師器	高坏 坏上部	D1	SA1				ナデ 工具痕 黒変	ナデ	にぶい橙 暗灰黄	橙	5mm大の褐灰の粒。2mm以下の灰白・暗灰・赤褐の粒 微細な透明光沢粒	
502	土師器	高坏 坏上部	D1	SA1				横ナデ	横ナデ	橙 にぶい黄橙	橙	5mm以下の灰白・灰褐・赤褐の粒。5mm以下の透明光沢粒	
503	土師器	高坏 坏部	D1	SA1				ナデ 横ナデ	横ナデ	橙・浅黄	にぶい黄橙	5.5mm以下の黒褐・暗灰・灰白・赤褐の粒。1mm以下の黒色光沢粒	
504	土師器	高坏 坏底部	D1	SA1				ナデ	ナデ	橙	明黄褐	5mm以下の白灰の粒。2mm以下のオリーブ黒光沢。1mm以下の黒色光沢粒。微細な光沢粒	
505	土師器	高坏 坏底部	D1	SA1				横ナデ スス付着 ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	5mm以下の赤褐色の粒。1.5mm以下の灰褐の粒。微細な純度光沢粒	
506	土師器	高坏 脚部	D1	SA1				ミガキ	ナデ	橙	橙	5mm以下の白褐色・褐色の粒 5mm以下の赤褐色・黒色の粒	
507	土師器	高坏 脚部	D1	SA1				ナデ	ナデ	橙 にぶい橙	橙 にぶい橙	5mm以下の暗赤褐の粒 5mm以下の褐灰の粒	
508	土師器	高坏 脚部	D1	SA1				ナデ	ナデ	橙 にぶい橙	橙 にぶい橙	5mm以下褐の小石。6mm以下の暗赤褐の小石。6mm以下の白色の粒	

第26表　Ｄ区出土遺物観察表１

遺物番号	種別	器種器位	出土地区	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
509	土師器	高坏脚部	D1	SA1				ナデ ミガキ 沈線	ナデ	橙 にぶい橙	橙	2mm以下の赤褐・褐灰・灰褐の粒 微細な透明光沢粒	
510	土師器	高坏脚部	D1	SA1				ナデ	ナデ	橙	明黄褐 橙	3mm以下の灰白・褐灰・褐の粒	
511	土師器	高坏脚部	D1	SA1				ナデ	ナデ	橙	橙	3mm以下の白粒色・赤褐色の粒	
512	土師器	高坏脚部	D1	SA1				ナデ	ナデ	橙 にぶい橙	橙 にぶい橙	3mm以下の灰褐の粒 3mm以下の乳白色の粒	
513	土師器	鉢 口縁～体部	D1	SA1				横ナデ 斜方向のナデ ススが付着	横ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	3mm以下のにぶい黄橙色上灰褐色の粒	
514	土師器	鉢 口縁	D1	SA1				ナデ	ナデ	橙	浅黄橙	6.5mm以下の灰白色の粒、微細なにぶい黄橙色の粒・無色透明の光沢粒	
515	土師器	鉢 口縁	D1	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	橙	2mm以下の赤褐・橙の小石 と 2mm以下の褐灰の粒、1mm以下の乳白色の粒	
516	土師器	鉢 口縁	D1	SA1				ナデ 黒変	ナデ ススが付着	橙	にぶい黄橙	微細な黒褐色の粒・無色透明の光沢粒	
517	土師器	鉢 口縁～底部	D1	SA1	14.2		7.5	ナデ	ナデ	橙 にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の黒色の微光沢粒 微細な黒色・乳白色も粒	
518	土師器	鉢 完形	D1	SA1	16.2		7.9	ナデ 黒変	ナデ	にぶい黄橙 橙	橙	微細な黒褐粒	
519	須恵器	甕 胴部	D1	SA1				刷毛ナデ 沈線 櫛描波状文	ナデ 指頭痕	灰	灰	3mm以下の灰白色の砂粒	
520	土師器	甕 口縁～胴部	D1	SA2	(35.4)			横ナデ 工具痕	横ナデ 指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の褐灰・褐の粒	
521	土師器	甕 口縁～胴部	D1	SA2	(36.0)			横ナデ 縦・斜方向ナデ 工具痕 黒変 縦ミガキ	横・斜方向のナデ 工具痕	黒褐・褐	褐・黒灰黄	2mm大の褐灰の粒、1mm以下の灰白・黒褐・黒色・透明の光沢粒	
522	土師器	甕 口縁～胴部	D1	SA2	(13.5)			ナデ 工具痕	ナデ 工具痕	橙	橙	微細～1.5mm大の黒褐色・褐灰色・灰白色の粒、微細～1mm大の黒色透明・黒色の粒	
523	土師器	甕 胴部～底部	D1	SA2				縦・斜方向のハケ目	斜方向のハケ目	にぶい橙	灰	微細～3mm大の黒色光沢粒、微細～2.5mm大の黒色・褐灰色・にぶい赤褐色の粒	
524	土師器	甕 口縁～胴部	D1	SA2				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm大の褐の粒 2mm以下の灰褐の粒	
525	土師器	甕 口縁～胴部	D1	SA2				ナデ 横ナデ 風化気味	ナデ 風化気味	にぶい黄橙 にぶい黄	にぶい黄橙	2mm以下の黄灰・灰黄の粒	
526	土師器	甕 口縁	D1	SA2				横ナデ ナデ ススが付着	横ナデ	橙	明黄褐	2mm以下の灰褐褐・褐の粒 微細な黒色・無色透明の光沢粒	
527	土師器	甕 口縁～胴部	D1	SA2				ナデ 横ナデ 沈線状の工具痕	ナデ	明赤褐	明褐	1～2mm大の灰白・褐灰の粒 2mm以下の灰白・褐灰・褐の粒	
528	土師器	壺 口縁～胴部	D1	SA2	(17.4)			縦方向の工具痕後横ナデ 横ナデの後斜方向に工具痕 ハケ目 黒変	縦方向の工具痕後横ナデ 縦方向の工具痕	橙	にぶい橙	微細～3mm大の黒色上黒色透明の光沢粒 1～3mm大の褐灰色・浅黄橙の粒	
529	土師器	壺 胴部～底部	D1	SA2			(4.15)	風化著しい その後方向にミガキ ナデ	ナデ 粘土紐の接合痕	明赤褐 にぶい黄橙	明赤褐 にぶい橙	2mm以下の黒褐・褐灰・灰褐の粒 2mm以下の黒色・透明光沢粒	
530	土師器	壺 胴部	D1	SA2				ミガキ状の丁寧なナデ	ナデ 工具痕 指頭痕	橙	橙	2mm以下の灰白・褐灰・褐の粒	
531	土師器	壺 口縁～底部	D1	SA2				ミガキ 黒変	ナデ 風化著しい	にぶい黄橙	にぶい橙	微細～6mm大の黒色・黒色の粒、微細～1.5mm大の灰白色の粒、1.5mm以下の黒色・無色透明の粒、微細な黒色透明の光沢粒	
532	土師器	鉢 口縁～体部	D1	SA2	12.95			ナデ 横ミガキ	ミガキ状の丁寧なナデ 指頭痕	橙	橙	2mm以下の灰白・褐赤褐・黒褐の粒	
533	土師器	高坏 口縁～脚部	D1	SA2	(30.4)			ナデ 横ナデ	横ナデ	橙	橙	2mm以下の灰白・褐・褐灰の粒	
534	土師器	高坏 口縁	D1	SA2				ナデ 横ナデ ススが付着 黒変	ナデ 指頭痕	橙	橙 にぶい黄橙	2mm以下の灰白・黒褐・褐灰の粒 微細な光沢粒	
535	土師器	高坏 口縁	D1	SA2	(16.1)			ナデ 横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	3mm以下の灰白・褐灰の粒	
536	土師器	高坏 口縁～脚部	D1	SA2				横ナデ ススが付着	横ナデ	にぶい橙 にぶい褐	にぶい橙 にぶい黄橙	3mm以下の褐灰・褐の粒灰褐の粒	
537	土師器	鉢 口縁～体部	D1	SA2				横ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	3mm以下の灰褐色・黒褐色の砂粒	
538	土師器	壺 底部	D1	SA2	底径6.4 短径5.9			ナデ 工具痕	ナデ 工具痕	にぶい黄橙	灰	3mm以下の灰白・灰・褐灰の粒、2mm程度の黒褐・赤褐の粒、微細な透明光沢粒	
539	土師器	壺 底部	D1	SA2		6.9		ナデ 黒変	ナデ 工具痕 指頭痕 ススが付着 黒変	明黄褐 にぶい黄橙	橙・にぶい橙	2mm～10mm以下の褐・赤褐の粒、2mm以下の褐灰の粒、1mm以下の黒色・透明光沢粒	
540	土師器	高坏 坏部	D1	SA2	(17.4)			ミガキのあとナデ 黒変	斜方向のナデ	黄橙	浅黄	3mm以下の灰白・灰褐色・黒褐色の砂粒、0.5mm以下の黒色の砂粒、金色の光沢粒	539と同一
541	土師器	高坏 脚部	D1	SA2									540と同一
542	土師器	高坏 坏部	D1	SA2	(20.60)			横ナデ	横ナデ	明黄褐・橙	橙	3mm以下の白色の粒 2mm以下の黒色・白色半透明の粒	
543	土師器	高坏 坏底部	D1	SA2				横ナデ	横ナデ ナデ 風化気味	浅黄橙	橙	3mm以下の灰白色・灰褐色・黒褐色の粒	
544	土師器	高坏 脚部	D1	SA2				横ナデ 黒変	ナデ	橙	明赤褐 にぶい黄橙	3mm以下のにぶい赤褐の粒 3mm以下の黒色・透明光沢粒	
545	土師器	小型鉢 完形	D1	SA2	6.73	5.48	4.15	指ナデ 黒変	ナデ	橙・灰黄褐	明黄褐・橙	3mm以下の金色・黒色・白色の粒	
546	土師器	甕 口縁	D1	SA3	(36.5)			横 黒変 ススが付着	横ナデ 黒変	褐灰・灰黄褐	にぶい黄橙	3mm以下の灰白・褐灰の粒 3mm以下の黒色・透明光沢粒	
547	土師器	甕 胴部	D1	SA3				ミガキ状のナデ 粘土紐痕 黒変 ススが付着	ナデ 工具痕	にぶい褐 黄褐	にぶい黄橙	3mm以下の灰白色の粒、褐灰の粒 3mm以下の黒色・透明光沢粒	
548	土師器	小型鉢 胴部～底部	D1	SA3		2.9		ナデ 黒変	ハケ目の後ナデ	橙	橙	2mm以下の灰褐色・黒褐色の粒 黒色透明の光沢粒	
549	土師器	高坏 坏部	D1	SA3	(19.4)			工具による斜方向のナデ の後横ナデ	横ナデ	橙	橙	2mm以下の灰白色・黒褐色・灰褐色の砂粒	

第27表　D区出土遺物観察表２

遺物番号	種別	器種	出土地区	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
550	土師器	甕 口縁	D1	SA4				ナデ　横ナデ　指頭痕	横ナデ　工具痕	橙・にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mm以下の灰白・褐灰・黒褐の粒 0.5mm以下の黒色・透明光沢粒	
551	土師器	甕 胴部	D1	SA4				ミガキ　斜方向に工具痕　黑変　粘土紐痕	ナデ　斜方向の工具痕	橙・にぶい黄橙	にぶい黄橙 にぶい褐	5mm以下の灰白・褐灰の粒	
552	土師器	杯 口縁	D1	SA4				横ナデ　斜方向のナデ	横ナデ	にぶい黄橙 にぶい褐	明赤褐 にぶい黄橙	5mm以下の灰白・褐灰の粒	
553	土師器	高杯 杯部～脚部	D1	SA4				中心から放射状にハケ目 縦・斜方向の丁寧なナデ　黑変　横ナデ	ハケ目	明赤褐 にぶい黄橙	明赤褐 にぶい黄橙	2mm以下の白色・灰・黒褐の粒 5mm以下の半透明・透明の光沢粒	
554	土師器	高杯 脚部	D1	SA4				ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙・黄灰	2mm以下の赤褐・灰白・灰色の粒 微細な黑色・白色の光沢粒	
555	土師器	高杯 脚部	D1	SA4				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	5mm以下の赤褐色・白色の粒 5mm以下の黑色微光沢粒	
556	土師器	壺 口縁	D1	SA5				横ナデ　黑変	横ナデ	橙	橙	0.5mm以下の灰白色・灰褐色の砂粒	
557	土師器	高杯 杯部	D1	SA5	(17.8)			ミガキの後ナデ	横ナデ　ミガキの後ナデ　黑変	にぶい橙	にぶい橙	5mm以下の灰白色・灰褐色・黑褐色の砂粒	
558	土師器	高杯 杯部	D1	SA5	(17.5)			ミガキの後ナデ　黑変	ミガキの後ナデ	橙	橙	0.5mm以下の灰白・灰褐色の砂粒	
559	土師器	高杯 杯部～脚部	D1	SA5				ナデ	ナデ	橙	橙	5mm以下の白色半透明の粒、2mm以下の赤褐色の粒、1mm以下の黑色の粒	
560	土師器	高杯 杯部～脚部	D1	SA5		(3.1		ナデ	ナデ	橙	橙	2mm以下の白色・黑色・赤褐色の粒	
561	陶器	甕（ほぼ完） 口縁～底部	D2	SC1	(63.3)		(38.1)	風化著しい　ナデ　横ナデ	風化著しい　ハケ目　ナデ	灰黄・褐	灰・黄灰	50mm～5mm大の灰白の粒、2mm以下の灰白の粒、1mm以下の褐灰・黑褐・透明の光沢粒	
562	土師器	甕 口縁～胴部	D1					ナデ　横ナデ　黑変　縦・斜方向のナデ　工具痕	横ナデ　ナデ　工具痕	明赤褐	にぶい赤褐 にぶい黄橙	2mm以下の灰白・褐灰・黑褐の粒 5mm以下の透明光沢粒	
563	土師器	甕 口縁～胴部	D1		(22.1)			ナデ　ハケ目　風化気味	ハケ目　ナデ　工具痕	淡黄	淡黄	5mm以下の褐・明褐・褐灰の粒	
564	青磁	瓶 口縁	D1	SG1				施釉	施釉	灰オリーブ 灰白	灰白		輸入品
565	青磁	瓶 底部	D1	SG1				施釉　高台内露胎	施釉	にぶい黄	黄灰		輸入品
566	白磁	瓶 口縁～底部	D1	SA2	(10.2)	(3.3)	(2.7)	施釉　底部露胎　ヘラ切り	施釉　見込みに圏線	灰白	灰白		
567	白磁	瓶 口縁～体部	D1					玉縁口縁　施釉	施釉	灰白	灰白		
568	白磁	瓶 底部	D1	SG1		(5.45)		施釉貫入	施釉貫入	灰白	灰白		朝鮮系
569	陶器	瓶 底部	D1	SG1		(4.15)		施釉貫入　畳付釉剥ぎ	施釉貫入　胎土目	灰・にぶい褐	にぶい橙		唐津
570	陶器	瓶 体部～底部	D1	SG1		(5.2)		施釉貫入　畳付釉剥ぎ	施釉貫入	淡黄	灰白		
571	陶器	瓶 口縁～胴部	D1	SA5	2.65			施釉	胴上部のみ施釉	褐 灰オリーブ	灰白		
572	土師質	土鍋	D1	SE1	最2.85	頸1.77	重86.9g						
573	須恵器	壺 口縁	D2	SC2	(36.0)			回転ナデ　風化著しい	ナデ　風化著しい	灰白・浅黄	灰白	5.5mm以下の褐の粒	
574	白磁	碗 口縁～体部	D2					玉縁口縁　施釉	施釉	灰白	灰白		
575	陶器	壺 口縁～胴部	D2					回転ナデ　施釉　焼土粒による花状の貼付	回転ナデ	黑褐	にぶい黄橙		
576	陶器	碗底 口縁～胴部	D2					回転ナデ　工具痕	回転ナデの後縦方向に5条の櫛目	明灰黄 にぶい黄橙	黄灰・浅黄	2mm以下の白粒色の粒 5mm以下の黑色の粒	瀬戸
577	土師質	土鍋	D2		長4.1	幅2.45	重17.4g						
581	土師器	杯 杯部						ミガキ	ナデ　風化著しい	にぶい橙	にぶい橙	5mm以下の灰黄褐色の粒 1mm以下の黑色透明の光沢粒	
582	土師質	鉢 口縁						ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5.5mm以下の灰白色・黑褐色・灰褐色の砂粒	
583	白磁	碗 口縁～体部						玉縁口縁　施釉	施釉	灰白	灰白		
584	青磁	碗 口縁						施釉	施釉	オリーブ灰	灰白		
585	青磁	碗 底部				(4.45)		施釉　高台内露胎	施釉　蛇の目釉剥ぎ	明緑灰	灰白		
586	土師質	鉢底 口縁～体部			(23.4)			横ナデ　工具痕　黑変	横・斜方向のナデ	橙	にぶい橙	6.5mm以下の灰白色・灰褐色・茶褐色の砂粒	

第28表　D区出土遺物観察表３

遺物番号	器種	調査区	出土地点	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
578	砥石	D２	－	頁岩	5.65	3.00	1.00	22.90	
579	磨石	D１	SA4	砂岩	11.50	9.10	6.00	924.0	四隅に敲打痕
580	砥石	D１	SA5	砂岩	18.50	3.10	1.70	242.1	

第29表　D区出土石器計測表

第Ⅶ章　自然科学分析

第１節　宮崎県延岡市、林遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

１．林遺跡における放射性炭素年代測定

（１）試料と方法

試料名	地点・層準	種 類	前処理・調整	測定法
No.1	Ｃ４区ＳＣ２	骨	コラーゲン抽出，石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.2	Ｃ４区ＳＣ１	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄，ベンゼン合成	β線計数法
No.3	Ｃ６区貝塚	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.4	Ｄ１区ＳＡ１	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄，ベンゼン合成	β線計数法
No.5	Ｄ１区ＳＡ２	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.6	Ｃ３区ＳＣ７	炭化種子（炭化米）	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析(AMS)法

（２）測定結果

試料名	^{14}C年代	δ^{13}C	補正^{14}C年代	暦年代（西暦）	測定No
No.1	101.0%±0.7%	−10.4	160±60	交点：AD1680, 1745, 1805, 1935 1σ：AD1665～1890, AD1905～1950 2σ：AD1650～1950	125535
No.2	360±60	−28.7	300±60	交点：AD1640 1σ：AD1515～1585, AD1625～1655 2σ：AD1470～1670, AD1780～1795 AD1945～1950	125536
No.3	850±60	−28.9	790±60	交点：AD1260 1σ：AD1215～1285 2σ：AD1165～1300	125537
No.4	1690±60	−30.8	1590±60	交点：AD450 1σ：AD415～555 2σ：AD370～615	125538
No.5	1760±70	−28.0	1710±60	交点：AD370 1σ：AD245～420 2σ：AD160～530	125539
No.6	640±40	−24.1	650±40	交点：AD1300 1σ：AD1290～1315, AD1350～1390 2σ：AD1280～1405	136469

１）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C／^{12}C比から、単純に現在（1950年ＡＤ）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は5,568年を用いた。

2）δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C／^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C／^{12}C）。この値は、標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C／^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。較正には年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、サンゴのU-Th年代と^{14}C年代の比較により作成された補正曲線を使用した。暦年代の交点とは較正^{14}C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（68％確率）・2σ（95％確率）は、較正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

2．林遺跡における種実同定

（1）試料

試料は、C３区ＳＣ７から出土した炭化種実である。

（2）方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。

（3）結果

同定の結果を以下の表に示し、保存状況が良好な試料について実体顕微鏡写真を示す。

表１　林遺跡における種実同定結果

出土遺構	分類群（和名／学名）	部位	個数	備　考
C３区ＳＣ７	イネ *Oryza sATiva* L.	炭化果実	59	破片多数

イネ *Oryza sATiva* L.　炭化果実　イネ科

果実は黒色で炭化している。楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

（4）考察

C３区ＳＣ７から出土した炭化種実は、イネの炭化果実（炭化米）であった。計測を行った結果、平均値で長さ4.3㎜、長さと幅の比が1.7であった（表２）。佐藤敏也（1971）の分類では、極々小粒で短粒のコメに比定される。弥生時代では極小粒で短粒のものが中心であり、古墳時代以降は中粒から大粒、

長粒のものが増加する傾向がある。

文献

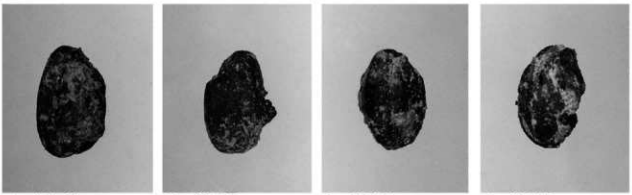
佐藤敏也（1988）弥生のイネ．弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣出版株式会社，　p.97-111.

佐藤敏也（1971）日本の古代米，雄山閣出版株式会社．

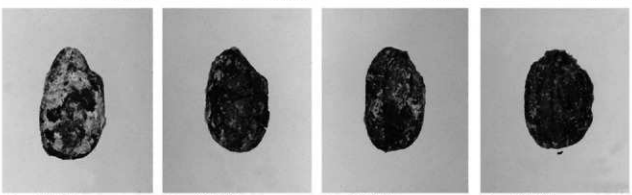
表２　林遺跡出土イネ果実実測値

資料No	長さ（mm）	幅（mm）
1	4.3	2.6
2	4.0	2.5
3	4.0	2.5
4	4.0	2.6
5	4.2	2.5
6	4.1	2.4
7	4.0	2.2
8	3.9	2.8
9	3.9	2.7
10	4.3	2.7
11	4.7	2.8
12	4.0	2.4
13	4.2	2.1
14	4.0	2.6
15	4.0	2.0
16	4.1	2.4

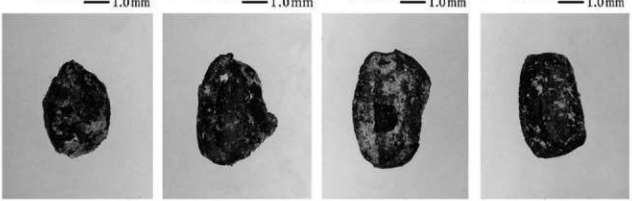
写真１　林遺跡の種実



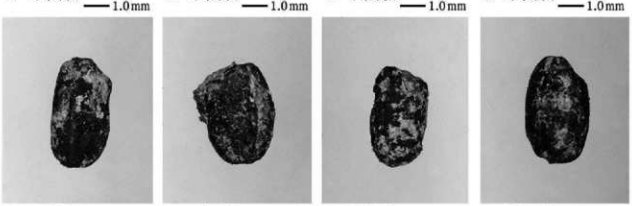
1　イネ果実　1.0mm　2　イネ果実　1.0mm　3　イネ果実　1.0mm　4　イネ果実　1.0mm



5　イネ果実　1.0mm　6　イネ果実　1.0mm　7　イネ果実　1.0mm　8　イネ果実　1.0mm



9　イネ果実　1.0mm　10　イネ果実　1.0mm　11　イネ果実　1.0mm　12　イネ果実　1.0mm



13　イネ果実　1.0mm　14　イネ果実　1.0mm　15　イネ果実　1.0mm　16　イネ果実　1.0mm

3．林遺跡から出土した木材の樹種同定

（1）試料

試料は、Ｄ３区から出土した柱材である。

（2）方法

カミソリを用いて、新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

（3）結果

結果を表１に示し、同定の根拠となった特徴を記す。また、各断面の顕微鏡写真を示す。

表１　林遺跡から出土した木材の樹種同定結果

試料	樹種（和名／学名）
Ｄ３区，柱材	タブノキ　*Machilus thunbergii* Sieb.et Zucc.

タブノキ　*Machilus thunbergii* Sieb.et Zucc.　クスノキ科

横断面：やや小型の道管が、単独および２～数個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔または少数ではあるが、数の少ない階段穿孔が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で、上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～２細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

（4）所見

分析の結果、Ｄ－３区から出土した柱材はタブノキと同定された。タブノキは暖温帯の照葉樹林の主要構成要素であり、海岸部にも生育する常緑広葉樹である。高さ15m、径１mに達し、材は耐朽性、保存性ともに中庸で、建築、家具、土木、器具、楽器、船、彫刻、薪炭などに用いられる。

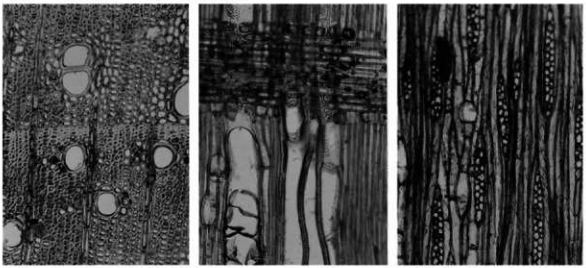
文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296 p.

写真２　林遺跡出土木材の顕微鏡写真



断面図 ―――― 0.2mm　放射断面 ―――― 0.2mm　接線断面 ―――― 0.2mm

Ｄ－３区　柱材　タブノキ

４．林遺跡における植物珪酸体分析

（１）はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987）。

（２）試料

分析試料は、Ｄ１区Ｃ・10グリッド、Ｃ２区Ｉ・６グリッド、Ｃ３区ＳＣ７の３地点から採取された計28点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

（３）分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

２）試料約１ｇに直径約40μｍのガラスビーズを約0.02ｇ添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波水中照射（300Ｗ・42KHz・10分間）による分散

５）沈底法による20μｍ以下の微粒子除去

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

（4）分析結果

a．分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）、Bタイプ

〔イネ科ータケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

〔イネ科ーその他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、その他

b．植物珪酸体の検出状況

1）D1区C・10グリッド（図1）

Ⅱ層（試料1）からⅤ層（試料9）までの層準について分析を行った。その結果、Ⅴ層（試料8、9）では、ウシクサ族Aやミヤコザサ節型が比較的多く検出され、イネ科Bタイプ、ネザサ節型、クマザサ属型なども検出された。イネ科Bタイプはヌマガヤ属に類似しており、おもに氷期の湿地性堆積物から特徴的に検出されている。Ⅳ層（試料5～7）では、クマザサ属型やミヤコザサ節型が増加しており、イネ科Bタイプは見られなくなっている。Ⅲ層（試料2～4）ではススキ属型が出現しており、ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）などの樹木（照葉樹）も検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。Ⅱ層（試料1）では、ブナ科（シイ属）やマンサク科（イスノキ属）が増加しており、クマザサ属型やミヤ

コザサ節型は減少している。

2）C2区Ⅰ・6グリッド（図2）

Ⅳ層（試料1）からⅨ層（試料11）までの層準について分析を行った。その結果、Ⅸ層（試料11）ではウシクサ族Aが比較的多く検出され、キビ族型、ススキ属型、イネ科Bタイプ、ミヤコザサ節型なども検出された。Ⅶa層（試料7～10）では、ミヤコザサ節型が増加傾向を示し、ネザサ節型やクマザサ属型も出現している。Ⅴ層（試料4、5）ではミヤコザサ節型が増加しており、ススキ属型やイネ科Bタイプは見られなくなっている。Ⅳ層（試料1～3）では、ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）などの樹木（照葉樹）が出現しており、イネも700個／gと少量検出された。同層は土層の堆積が不安定であり、後代の撹乱の影響を受けている可能性が考えられる。

3）C3区SC7（図3）

SC7の埋土（試料1～8）について分析を行った。その結果、埋土底部（試料7、8）ではウシクサ族A、イネ科Bタイプ、ネザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。埋土下部（試料4～6）でもおおむね同様の結果であるが、埋土上部（試料1～3）ではススキ属型が出現している。ピット状遺構の埋土における植物珪酸体の組成や量の特徴は、C2区Ⅰ・6グリッドの4b層と類似している。

（5）考察

a．植生と環境の推定

姶良Tn火山灰（AT，約2.4-2.5万年前）より下位のⅦa層～Ⅸ層の堆積当時は、ススキ属やチガヤ属、キビ族、クマザサ属（おもにミヤコザサ節）、ネザサ節などが生育するイネ科植生であったと考えられ、周辺にはイネ科Bタイプの給源植物（ヌマガヤ？）などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

AT直上のⅤ層から石器包含層のⅣ層にかけては、クマザサ属（おもにミヤコザサ節）などのササ類を主体としたイネ科植生であったと考えられ、何らかの原因でススキ属やイネ科Bタイプの給源植物は見られなくなったと推定される。

タケ亜科のうち、メダケ属ネザサ節は温暖、クマザサ属は寒冷の指標とされており、ネザサ率（両者の推定生産量の比率）の変遷は、地球規模の氷期－間氷期サイクルの変動とよく一致することが知られている（杉山・早田，1996）。ここでは、クマザサ属が卓越していることから、当時は比較的寒冷な気候条件で推移したと推定される。また、クマザサ属のうちミヤコザサ節は太平洋側の積雪の少ない比較的乾燥したところに分布している（室井，1960）ことから、当時は積雪の少ない比較的乾燥した環境であったと推定される。クマザサ属は常緑であることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカなどの草食動物の重要な食物となっている（高槻，1992）。遺跡周辺にササ類が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。

鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，約6,300年前）直下のⅢ層からK-Ah混のⅡ層にかけては、周辺でシイ属、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が成立・拡大した考えられ、林床植生などとしてササ類が生育

していたと考えられる。また、周辺にはススキ属やチガヤ属などが生育する草原的なところも見られたと推定される。

b．C３区ＳＣ７について

ピット状遺構の埋土は、植物珪酸体の組成や量の特徴などから、Ｃ２区Ⅰ・６グリッドのⅦa層（ＡＴ下位）に対比される可能性が考えられる。

文献

杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究，第２号，p.27-37.

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.

杉山真二・早田勉（1996）植物珪酸体分析による宮城県高森遺跡とその周辺の古環境推定－中期更新世以降の氷期－間氷期サイクルの検討－．日本第四紀学会　講演要旨集，26，p.68-69.

杉山真二（1997）人類をとりまく植生と環境．宮崎県史通史編「原始・古代」．p.150-172.

高槻成紀（1992）北に生きるシカたち－シカ、ササそして雪をめぐる生態学－．どうぶつ社.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

室井綽（1960）竹笹の生態を中心とした分布．富士竹類植物園報告，5，p.103-121.

植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

（倍率はすべて400倍）

№	分類群	地　点	試料名
1	キビ族型	Ｃ２区Ⅰ・６グリッド	5
2	ヨシ属	Ｃ２区Ⅰ・６グリッド	7
3	ススキ属	Ｄ１区Ｃ・10グリッド	1
4	イネ科Ｂ	Ｄ１区Ｃ・10グリッド	8
5	メダケ節型	Ｄ１区Ｃ・10グリッド	3
6	ネザサ節型	Ｃ２区Ⅰ・６グリッド	5
7	クマザサ属型	Ｄ１区Ｃ・10グリッド	8
8	ミヤコザサ節型	Ｄ１区Ｃ・10グリッド	1
9	表皮毛起源	Ｃ３区ＳＣ７	4
10	ブナ科（シイ属）	Ｄ１区Ｃ・10グリッド	1
11	クスノキ科	Ｄ１区Ｃ・10グリッド	1
12	マンサク科（イスノキ属）	Ｄ１区Ｃ・10グリッド	1

表1　宮崎県、林遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	D1区C・10グリッド 1	2	3	4	5	6	7	8	9	D2区I・6グリッド 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	C3区SC7 1	2	3	4	5	6	7	8
イネ科	Gramineae (Grasses)																												
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)										7	7																	
キビ族型	Panicae type		7	7											6	7	7		21	20	7				7				
ヨシ属	*Phragmites* (reed)						7										7												
ススキ属型	*Miscanthus* type	22	21	36	14	7						20	7						7	20	14	38	13	14					
ウシクサ族A	Andropogonese A type	22	42	36	57	43	7	7	21	65	14	46	28	43	19	27	73	45	57	40	89	76	33	70	43	28	29	34	7
ウシクサ族B	Andropogonese B type																					13							
Bタイプ	B type								7	6								6	7	13	7	6	7	28	14		15		7
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)																												
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*			7																									
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*	7	14	22	14	7		7		6	14	13		14	6		7	6	14	7		44	7	7	21	14	7	7	15
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakoazasa*)	7	49	144	57	94	44	22	7	6	28	20	63	7	26	27	22	6	14	7		6		7		7			
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakoazasa*	117	21	173	121	239	249	234	146	19	83	112	56	122	142	34	73	57	85	40	27	13	53	21	21	21	44	14	7
未分類等	Others	51	56	58	28	72	7	51	56	19	41	26	42	57	71	41	51	13	28	53	41	57	33	14	7	28	15	7	15
その他のイネ科	Others																												
表皮毛起源	Husk hair origin		7	7		7	15	22	7			7	7		13	7			7	13		13	20	7	7				7
棒状珪酸体	Rod-shaped	293	336	555	376	449	264	139	139	104	172	218	265	143	194	124	352	261	369	422	247	203	219	118	114	117	73	88	66
茎部起源	Stem origin		14										7																
未分類等	Others	498	476	641	539	709	557	403	354	337	413	495	599	408	427	385	455	420	482	415	378	387	399	292	256	248	233	157	139
樹木起源	Arboreal																												
ブナ科(シイ属)	*Castanopsis*	81	7	7	21						7																		
クスノキ科	Lauraceae	22	21	22	14							7		7															
マンサク科(イスノキ属)	*Distylium*	59	21									26																	
その他	Others	15		7							7	20	7					6											
植物珪酸体総数	Total	1194	1092	1723	1241	1629	1151	886	736	564	784	1017	1080	803	906	652	1050	821	1092	1048	811	856	785	577	490	462	416	306	263

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)										0.20	0.19																	
ヨシ属	*Phragmites* (reed)						0.46										0.46												
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.27	0.26	0.45	0.18	0.09						0.25	0.09						0.09	0.25	0.17	0.47	0.16	0.17					
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*			0.08																									
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*	0.04	0.07	0.10	0.07	0.03		0.04		0.03	0.07	0.06		0.07	0.03		0.04	0.03	0.07	0.03		0.21	0.03	0.03	0.10	0.07	0.03	0.03	0.07
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakoazasa*)	0.05	0.37	1.08	0.43	0.71	0.33	0.16	0.05	0.05	0.21	0.15	0.47	0.05	0.19	0.21	0.17	0.05	0.11	0.05		0.05		0.05		0.05			
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakoazasa*	0.35	0.06	0.52	0.36	0.72	0.75	0.70	0.44	0.06	0.25	0.34	0.17	0.37	0.43	0.10	0.22	0.17	0.26	0.12	0.08	0.04	0.16	0.06	0.06	0.06	0.13	0.04	0.02

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*			5																									
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*	8	14	6	8	2		4		23	13	12		14	5		8	12	16	16		71	17	23	62	37	21	44	76
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakoazasa*)	12	74	60	50	48	31	18	11	35	40	27	74	11	30	67	39	19	25	25		16		35		29			
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakoazasa*	80	13	29	42	49	69	78	89	42	48	61	26	75	65	33	52	69	59	59	100	13	83	42	38	34	79	56	24

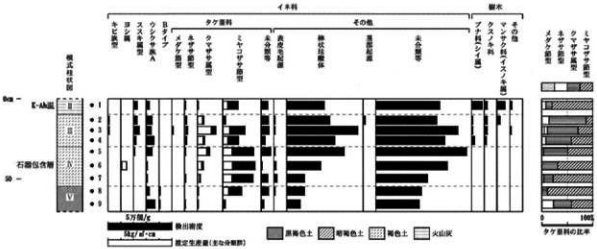


図1　林遺跡　D1区C·11グリッドにおける植物珪酸体分析結果

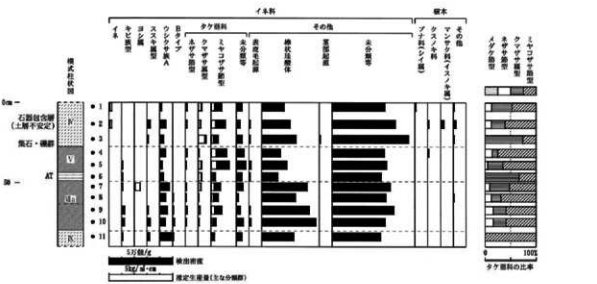


図2　林遺跡　C2区I·6グリッドにおける植物珪酸体分析結果

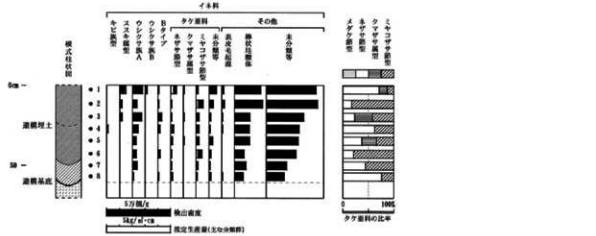
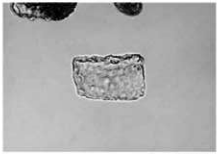


図3　林遺跡　C3区SC7における植物珪酸体分析結果

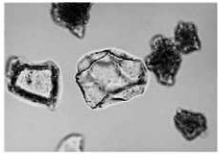
写真３　植物珪酸体（プラントオパール）の顕微鏡写真

1．キビ族型

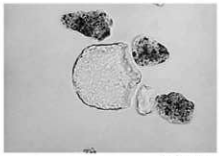


4．イネ科Ｂ

7．クマザサ属型



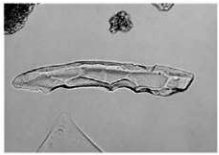
10．ブナ科（シイ属）



2．ヨシ属

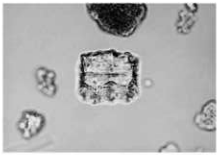
5．メダケ節属

8．ミヤコザサ属

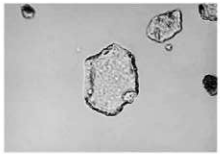


11．クスノキ科

3．ススキ属



6．ネザサ節型



9．表皮毛起源

12．マンサク科（イスノキ科）

第２節　延岡市林遺跡出土のウシ、ウマの遺体

西中川　駿・久林朋憲・尾崎陽子
（鹿児島大学獣医学科解剖学教室）

１．はじめに

古代の形質を残して、今なお系統保存されているわが国の在来牛に萩市見島の見島牛と鹿児島県十島村の口之島野生化牛の２集団があり、また、在来馬には宮崎県都井岬の御崎馬、長野県開田村の木曽馬、鹿児島県十島村のトカラ馬、沖縄県与那国島の与那国馬など８集団が系統保存されている。これらの集団は明治政府による洋種との交雑により改良されずに今日に至った在来種であり、遺跡から出土するウシ、ウマの遺体と比較するのに貴重な資料を提供している。

わが国のウシの出土例は、少なくとも304カ所から報告されているが、地域別では九州が85ケ所と最も多く、次いで関東（81）、近畿（62）の順である。時代別では中世が94ケ所で最も多く、次いで古墳（41）、平安（29）である。一方、ウマの出土例は、623カ所以上あり、地域別では関東が247カ所と最も多く、次いで九州（105）、近畿（95）で、時代別では中世の149カ所が最も多く、次いで平安（116）、古墳（111）である。

宮崎県下で初めて動物遺体の出土例が報告されたのは、縄文後期から弥生時代の遺跡である松添貝塚（1955）からであり、ウマの出土例は、古墳時代の六野原１号墳、久見迫１号土壙から報告されている。最近では余り田遺跡からウシが、祇園原地区遺跡からウマの出土例が報告されている。

今回調査を依頼された林遺跡は、延岡市伊形町にあり、延岡道路（延岡南ＩＣ）建設に伴う調査のため、宮崎県教育委員会の指導のもとに、平成９年６月30日～平成12年７月31日まで発掘調査行い、旧石器時代、縄文時代、古墳時代、中近世にわたる複合遺跡である。動物遺体は、埋葬土坑（近世）から検出され、現地調査も行ったが、資料は発掘後当研究室へ持ち込まれたもので、ウシ、ウマの埋葬遺体が主体をなしており、ここではその概要を報告する。

２．出土状況と出土動物種

林遺跡から出土した動物遺体はウシ、ウマ、ネズミ、魚類である。

ウシはＣ２区ＳＺ２から検出され、遺構の規模は約4.5×5.7ｍで、出土状況を発掘時の図面や写真からみると、遺構内に下顎骨や前肢骨などが散乱した状態で出土している（１号ウシと記載する、以下同じ）。出土重量は890.68ｇである。Ｃ４区ＳＣ２の土坑は、ウシ１頭分が入る大きさで楕円形をしており、頭部を北に左側を下にして埋葬されている（２号ウシ）。下顎骨と前肢骨、後肢骨がみられるが、頚椎、胸椎や肋骨などの胴骨はない。頭蓋骨は検出されていないが発掘時には、破片としてあったと思われる。出土重量は1129.1ｇである。ＳＣ４土坑は、長方形でやはり頭部を北にして、頚を曲げ左側を下にして埋葬されており、胴骨はない（３号ウシ）。頭蓋骨は左側の上顎骨のみが下顎と噛み合ってみられ、出土重量は865.9ｇである。ＳＣ10からは、ウシの右上腕骨片が出土しており、重量は81.8ｇである（４号ウシ）。

ウマはＣ２区ＳＣ５から出土し、土坑は1.77×1.1＋ｍの長方形を呈し、頭部を南東向きにして、右側を下にして前肢は折り曲げて、後肢は伸ばした状態で埋葬されている（１号ウマ）。胸椎、肋骨および

肢端を除くほぼ全身の骨が出土しており、重量は2056.1ｇである。Ｃ４区のＳＣ３の土坑は、ウマ１頭が入る長楕円形の土坑で、頭部を北にして埋葬されている（２号ウマ）。上、下顎臼歯が噛み合った状態で、臼歯のみが出土しており、出土重量は655.4ｇである。Ｄ２区ＳＣ１からは、図面がないために出土状況はわらないが、左右の上顎臼歯と下顎臼歯をもつ下顎体が検出されている（３号ウマ）。出土重量は835.7ｇである。Ｄ２区ＳＺ１からは趾骨が出土し（４号ウマ）、重さは32.3ｇである。Ｄ３区ＳＣ２は1.3×0.63ｍの長方形の土坑で頭部を北向きにして、右側を下して埋葬されている（５号ウマ）。発掘時には骨格の形がみられたが、保存状態が悪く、下顎の一部と臼歯のみを取り上げている。重量は334.8ｇである。

Ｄ２区ＳＺ１からは、ドブネズミの下顎骨（0.3ｇ）と大型魚類の椎骨（2.6ｇ）がそれぞれ１個検出されている。

３．出土骨の概要

（1）ウシ

１号ウシ（図版１の１～８参照）：

Ｃ２区ＳＺ２から頭蓋骨の小片、左第三前臼歯～第三後臼歯（P^3～M^3）、右第三後臼歯（M^3）を有する左右の上顎骨片、左第二前臼歯～第三後臼歯（P_2～M_3）および右第二前臼歯～第一後臼歯、第三後臼歯（P_2～M_1、M_3）有する左右の下顎骨片が、四肢骨では左右の上腕骨、橈骨が検出されている。左下顎の前臼歯列長は46.56㎜、後臼歯列長82.33㎜、左右の上腕骨最小幅と径はそれぞれ30.79，42.24㎜，30.92，41.34㎜であり、左橈骨の中央幅と径は36.91・21.51㎜である。これらの計測値から筆者らの方法で骨長を求めて体高を推定すると、115.68±5.11㎝である。また、臼歯の中心高から筆者らの方法で年齢を推定すると、12.31±1.47歳である。

２号ウシ（図版１の９～15参照）：

Ｃ４区ＳＣ２から左右の下顎骨は、切歯部と下顎枝を欠く下顎体で、左側は第二前臼歯（P_2）から第二後臼歯（M_2）を有し、M_2の歯冠長、歯冠幅と中心高は、それぞれ24.8、16.8、15.1㎜であり、臼歯の中心高から年齢を推定すると、14.5歳である。また、M_1での下顎体の高さと幅は、55.3、26.7㎜で、右側のM_3の歯冠長、歯冠幅、中心高は38.8、14.2、14.0㎜である。これらの計測値から体高を推定すると114.7±6.4㎝である。他に上腕骨、橈骨、大腿骨、脛骨、中足骨など12点も出土しているが、計測可能な部位はない。

３号ウシ（図版１の16～26参照）：

Ｃ４区ＳＣ４から左側の上、下顎骨、肩甲骨、左右上腕骨、前腕骨、左中手骨、左右大腿骨、脛骨、右中足骨など９点が出土している。左下顎骨は切歯部をもち、P_2からM_1を有する下顎体で、P_3の歯冠長、歯冠幅、中心高はそれぞれ15.9、9.9、14.3㎜であり、M_1での下顎体の高さと幅は52.2、24.7㎜である。右上腕骨の最小幅と径は32.7、39.2㎜、橈骨近位端の径は35.7㎜、中手骨の遠位端幅は51.9㎜、脛骨の中央幅は34.0㎜である。これらの計測値から体高を推定すると113.9±4.9㎝であり、歯の中心高から年齢を推定すると10.4歳である。

4号ウシ（図版なし）：

Ｃ４区ＳＣ10から右上腕骨１点のみの出土で細かく割れており、計測不可能であった。

以上、４個体のウシについて、その概要を述べたが、体高は113～115㎝で、在来牛の雌とほぼ同じ大きさである。また、年齢は12～15歳の老齢であり、農耕や繁殖に供していたものと思われる。

（２）ウマ

1号ウマ（図版２の１～17参照）：

Ｃ２区ＳＣ５より、左上顎臼歯、左右下顎骨、左上腕骨、左中手骨、右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左踵骨、左右距骨、左足根骨、および左右中足骨などが出土しているが、完形骨はない。下顎骨体のP_2での高さは54.08㎜で、M_1、M_2でのそれらは73.40、84.99㎜である。左右の大腿骨、脛骨、中足骨の中央幅と径はそれぞれ左38.89，36.29㎜、右38.75，36.22㎜、左37.14，29.40㎜、右37.94，29.54㎜、左27.92，28.97㎜、右27.97，28.86㎜である。これらの計測値から筆者らの方法で骨長を求め、林田らの方法で体高を推定すると126.19±3.19㎝である。また、臼歯の中心高より筆者らの方法で年齢を推定すると、17.30±2.50歳の老齢馬である。

2号ウマ（図版２の18～21参照）：

Ｃ４区ＳＣ３から頭蓋のみが出土し、上顎は骨体がなく臼歯のみで、左側はP^2からM^3、右側はP_2、P_3があり、左下顎はP_2からM_3有しているが、右側はP_2からM_2のみで、骨体はない。左上顎P_4の歯冠長、歯冠幅、中心高は、25.2、21.8、61.4㎜で、右下顎のM_1のそれらは、25.4、12.6、66.1㎜であり、他の臼歯の計測値を含めて、骨長を求め、体高を推定すると122.8±5.4㎝で、年齢は4.4±1.2歳である。

3号ウマ（図版３の１～５参照）：

Ｄ２区ＳＣ１から頭蓋のみが出土し、頭蓋骨は臼歯のみで、左右共にP^2からM^3があり、下顎骨は左右共にP_2からM_3を有する下顎体で、また破損はしているが上下の切歯を有している。右上顎M^1の歯冠長、歯冠幅、中心高は、22.7、24.9、13.4㎜で、右下顎P_4のそれらは、24.0、14.6、28.3㎜であり、他の臼歯の計測値を含めて体高と年齢を推定すると、123.7±5.1㎝で、15.5±3.0歳である。

4号ウマ（図版３の10参照）：

Ｃ２区ＳＺ１から右後肢の基節骨１点が検出されており、遠位の欠如した資料である。保存長82.8㎝で、近位端の幅と径は47.6㎜，36.6㎜であり、これらの計測値から骨長を求め、体高を推定すると123.7㎝である。歯の出土がないために年齢は不明である。

5号ウマ（図版３の６～９参照）：

Ｄ３区ＳＣ２から左右、上下の臼歯が出土している。出土した全臼歯を計測したが、ここでは右上顎、左下顎の臼歯の計測値を示す。P^2の歯冠長，歯冠幅，中心高は35.26，22.74，31.19㎜で、以下P^3～M^1の計測値はそれぞれ26.11，24.10，35.21㎜と、24.56，24.03，37.25㎜と、23.35，23.88，32.03㎜である。

P_2の歯冠長・歯冠幅・中心高は28.98，13.78，29.60㎜であり、以下P_3～M_2の計測値はそれぞれ27.03，15.31，34.27㎜、25.03，14.51，42.71㎜と、23.55，13.61，40.12㎜と、22.96，13.14，40.25㎜である。全計測値から体高、年齢を求めると122.08±3.72で、10.36±0.68歳と推定される。

以上、本遺跡から出土した５個体のウマについて、その概要を述べたが、体高は122～126㎝と在来馬の小型馬より大きく、中型馬より小さいタイプのウマである。また、年齢は２号馬を除き10～17歳の老齢馬であり、犬歯などが検出されていないことから、雌ウマと推測され、農耕や繁殖に供されていたと思われる。

ドブネズミ（図版３の11参照）：

Ｃ２区ＳＺ１から右下顎骨１点の出土で、保存長26.1㎜で、臼歯列長7.0㎜ある。

魚類（図版３の12参照）：

Ｃ２区ＳＺ１から出土の魚類は、椎骨１点の出土で、椎体長19.3㎜であり、カツオ類のものと思われる。

４．考　察

長谷部（1925）は茨城県陸平貝塚からウシの遺体を検出し、「石器時代に飼牛あり」を報告して以来、全国各地からウシの遺体の出土例が報告されている。

九州では筆者らの調査によれば、85ケ所から各時代のウシ遺体が出土しており、時代的には中世が多い。宮崎県からは余り田遺跡（７－８世紀）、鵜野内中水流遺跡（江戸）それに本遺跡（近世）の３ケ所からである。本遺跡のウシは明かな土坑に横臥された状態で検出されており、刀傷のないことから食糧とされたのではなく、死後埋葬されたものと考えられる。ウシの大きさは、余り田より小さく、体高113～115㎝であり、これは現存する見島牛や口之島野生化牛の雌と同じ大きさである。また、雌で老齢であることから農耕や運搬の他に繁殖にも供されていたことが考えられる。

一方、林田（1956）は、鹿児島県出水貝塚からウマ遺体を検出し、縄文時代に小型馬の存在を報告している。しかし、この出水貝塚のウマは、近藤（1992）らのフッ素による年代測定で、13世紀と報告されている。九州では105遺跡からウマの遺体が出土しており、時代的には中世が多く、地域別では福岡が最も多く（41ケ所）、次いで熊本（28）であり、宮崎からは久見迫、祇園原地区遺跡など７ケ所からの出土報告がある。祇園地区遺跡のウマは、臼歯のみの出土であるが、体高が129～132㎝と推定され、典型的な中型馬である。本遺跡のウマは推定体高122～126㎝であり、少し小さいが、中型馬の範疇にあり、犬歯などが検出されていないことから、雌ウマと推測される。２、５号ウマは土坑の壁に接してみられ、土坑の大きさから１体分が埋葬され、歯のみが残存したものと考えられる。

ウシやウマがいつ頃、どこから渡来したかは未だに明らかにされていない。ウシの最も古い出土例は、東京都の伊皿子貝塚の弥生中期であると言われ（金子1985）、欧州系のウシが朝鮮半島経由で、わが国へ人の移動とともに渡来したと考えられている。ウマは長崎県福江市の大浜遺跡からの臼歯が^{14}ＣでＡＤ40±90年と測定され、現在ではこれが最も古く弥生中期に蒙古系のウマが朝鮮半島経由で北部九州周辺に渡来したと考えられている。ウシやウマをの用途については、一般に運搬や農耕に使役していたこ

とが考えられるが、林遺跡のウシ、ウマは老齢で、雌であることから繁殖にも供しながら飼育されていたことがうかがえる。

以上、ウシ、ウマについて考察したが、ドブネズミや魚は、僅か各1点の出土であり、後世の混入も考えられ、特にネズミは食糧としたとは考えられない。

5．まとめ

延岡市林遺跡（近世）出土の動物遺体について調査した。

（1）林遺跡からは、ウシ（2967.4ｇ）、ウマ（3579.5ｇ）、ドブネズミ（0.3ｇ）および魚類（2.6ｇ）が出土し、総重量6549.8ｇである。

（2）1号ウシ（Ｃ2区ＳＺ2）は左右の上顎骨片、臼歯を伴う左右下顎骨、左右上腕骨、左橈骨などが出土し、体高115.7㎝で、12.3歳と推定される。2号ウシ（Ｃ4区ＳＣ2）は下顎骨、上腕骨、橈骨、大腿骨、脛骨など12点がみられ、各計測値から体高、年齢を推定すると、114.7㎝、14.5歳である。3号ウシ（Ｃ4区ＳＣ4）は上、下顎骨、肩甲骨、上腕骨、中手骨、大腿骨など9点が出土している。体高113.9㎝、年齢10.4歳と推定される。4号ウシ（Ｃ4区ＳＣ10）は上腕骨のみで、細骨片のため計測不能である。

（3）1号ウマ（Ｃ2区ＳＣ5）は上顎臼歯、下顎骨、上腕骨、中手骨、大腿骨、中足骨など出土しており、これらの計測値から体高、年齢を推定すると、126.19㎝、17.3歳である。2号ウマ（Ｃ4区ＳＣ3）は頭蓋と上、下顎の臼歯のみで、臼歯の計測値から体高、年齢を推定すると122.8㎝、4歳である。3号ウマ（Ｄ2区ＳＣ1）は上顎臼歯、臼歯をもつ下顎体で、体高123.7㎝、年齢15.5歳と推定される。4号ウマ（Ｄ2区ＳＺ1）は後肢の基節骨1点の出土で、体高123.7㎝と推定されたが、年齢は不詳である。5号ウマ（Ｄ3区ＳＣ2）は上、下顎の臼歯のみの出土で、臼歯の計測値から体高、年齢を推定すると、122㎝、10.4歳である。

（4）ウシ、ウマは農耕や運搬に使役され、ウマは騎馬にも利用されていたと考えられ、また、ウシ、ウマ共に解体痕はなく、老齢（2号ウマを除き）であることから繁殖にも供され、死後埋葬されたのであろう。

【参考文献】

1．長谷部言人：石器時代に飼牛あり、人類誌、54（10）、21-26（1939）

2．林田重幸：日本馬の系統に関する研究、pp1-180、日本中央競馬会、東京（1978）

3．金子浩昌ら：第2号方形周溝墓西溝出土の家牛頭骨、伊皿子貝塚遺跡、pp476-486、港区伊皿子貝塚遺跡調査会（1985）

4．近藤　恵他：出水貝塚出土ウマ遺存体の年代学的研究、日本文化財学会研究発表旨集、pp.70-71（1991）

5．宮崎県教育委員会：新富町祇園原地区遺跡出土の馬歯、祇園原地区遺跡、pp.91-95（1996）

6．宮崎県教育委員会：宮崎市余り田遺跡出土の動物遺体、余り田遺跡、pp166-169（1997）

7．宮崎県市委員会: 松添貝塚、宮崎市発掘調査報告書、2、1-21（1974）

8．西中川　駿ら：古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経関する研究、平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書、pp1-195（1991）

9．野澤　謙ら：家畜と人間、pp204-306、出光書店、東京（1981）

10．芝田清吾：日本古代家畜史の研究。pp100-293（1969）

【写真の説明】

図版１：１～８：１号ウシ（Ｃ２区ＳＺ２）　９～15：２号ウシ（Ｃ４区ＳＣ２）　16～26: ３号ウシ（Ｃ４区ＳＣ４）

1.左上顎骨（P^2～M^2）　2.頭蓋骨片　3.左下顎骨（P_2～M_3）　4.左M_2と右下顎骨　5.右上腕骨　6.左上腕骨
7.左橈骨　8.左腓骨　9.右下顎骨　10.左下顎骨　11.右大腿骨　12.左大腿骨　13.右腓骨　14.右中足骨　15.16.右上顎骨（P^2、P^3）
17.左下顎骨　18.右肩甲骨　19.右上腕骨　20.左上腕骨　21.左橈骨　22.右中手骨　23.右大腿骨　25.26.右中足骨

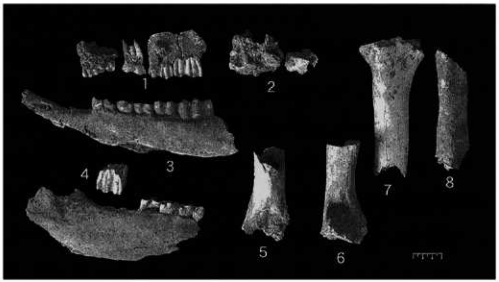
図版２：１～17：１号ウマ（Ｃ２区ＳＣ５）18～21：２号ウマ（Ｃ４区ＳＣ３）

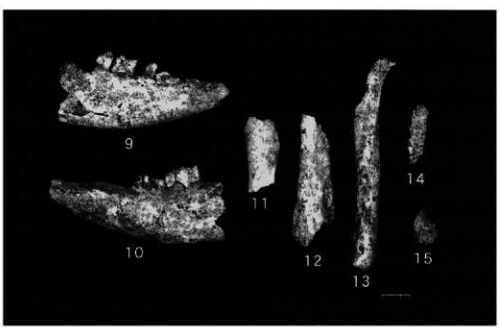
1.左上顎骨（P^2～M^3）　2.左下顎骨　3.右下顎骨　4.右下顎切歯　5.左上腕骨 6.左中手骨　7.右寛骨　8.9.左右大腿骨
10.11.左右腓骨　12.左踵骨　13.14.左右距骨　15.左足根骨　16.17.左右中手骨　18.右上顎右からP^2、P^3
19.下顎右からP_2～M_2　20.左上顎P^2～M^3　21.左下顎（P_2～M_3）

図版３：１～５：３号ウマ（Ｄ２区ＳＣ１）　６～９：５号ウマ（Ｄ３区ＳＣ２）　10：４号ウマ（Ｄ２区ＳＺ１）　11：ドブネズミ
12：魚類

1.右上顎右からP^2～M^3　2.右下顎右からP_2～M_3　3.左上顎左からP^2～M^3 4.下顎切歯　5.左下顎骨　6.左上顎左からP_2、P_3　7.左下顎P_2～M_2　8.右上顎右からP^2～M^1　9.右下顎右からP_2～M_2　10.右後肢基節骨　11.右下顎骨 12.椎骨

写真1





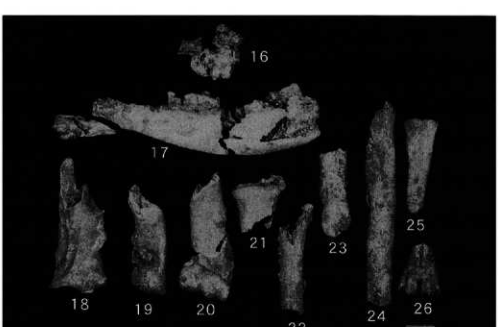
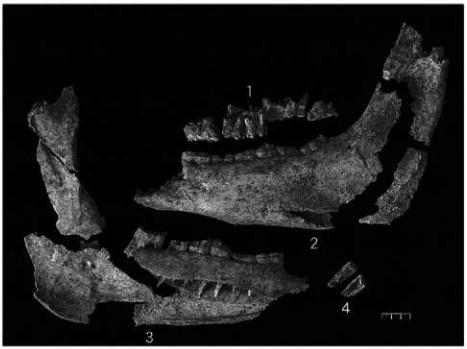
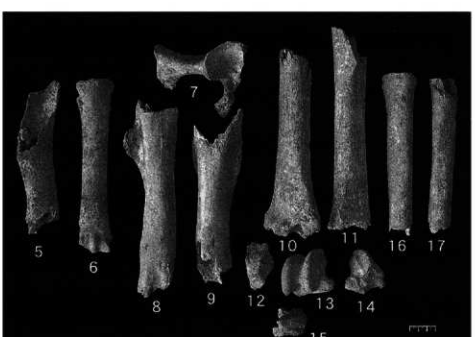


写真2





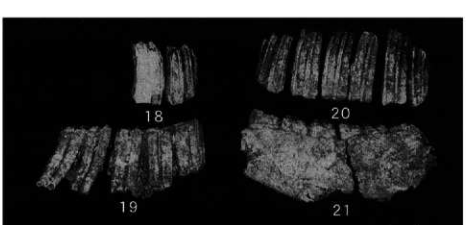
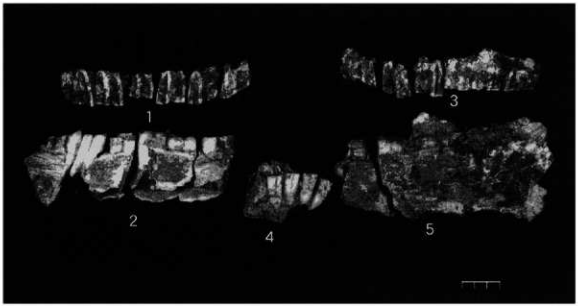
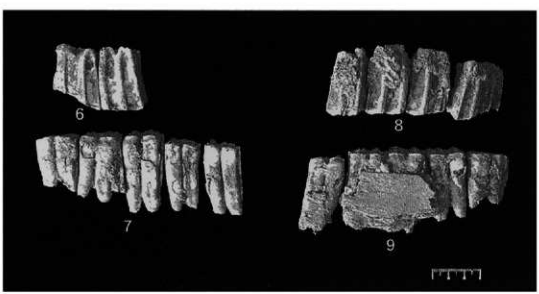


写真3





第Ⅷ章　まとめ

今回の調査では、旧石器時代から中近世にかけて遺構・遺物が確認されている。そのうち、特に注目されるものとして、姶良Tn火山灰層（以下、ＡＴ）上下で検出された旧石器時代の遺構や石器群、アカホヤ火山灰よりも上位で検出された遺構・遺物群の中で、35軒が確認された「掘立柱建物群」と、そのほとんどが廃棄・転用された多数の「五輪塔群」であった。ここでは、それらについて若干の考察を行い、まとめとする。

１．旧石器時代について

旧石器時代の石器群については、Ｃ１～４区・Ｄ１区で確認されている。大きく３つの時期（ＡＴ下位：第Ⅰ文化層、ＡＴ上位：第Ⅱ・Ⅲ文化層）に分けることができるものの、丘陵斜面に遺跡が立地していることもあり、土層堆積の不整合が認められること、他の層と比べ比較的安定しているⅣ層及びⅤ層についても浸食等による層の厚薄があることや表土下が石器群の包含層となるⅣ層になること、後世の遺構が掘り込まれていること等、遺物の包含状況にかなりの影響を与えている。

第Ⅰ文化層ではⅦa層下部で確認されている。少量の小型で横長の剥片や石核が出土しているが、指標となる製品類が認められないことから時期決定に欠ける。出土層位からみれば宮崎10段階編年[1]の第３段階のものと考えられる。

第Ⅱ文化層については、Ⅳ層からⅤ層にかけて総数1,257点の石器が出土し、本遺跡の主体となる石器群である。平面分布や垂直分布等の分析等、検討が十分とは言えず、さらに検討していく必要があるが、ナイフ形石器等の特徴から大きく２つの時期に分けることができる。

主要な石器の内訳は、ナイフ形石器53点、台形石器２点、剥片尖頭器24点、角錐状石器27点、スクレイパー84点、石鏃３点、彫器３点で、そのうちナイフ形石器では狸谷型ナイフ形石器をはじめ、国府系ナイフ形石器、今峠型ナイフ形石器・北牛牧型ナイフ形石器、基部加工のナイフ形石器等が確認されており、狸谷型ナイフ形石器やそれに近い切出形を呈するナイフ形石器、国府系ナイフ形石器の一群（同編年の第５段階）と今峠型ナイフ形石器（357）・北牛牧型ナイフ形石器（142・178・257）、基部加工のナイフ形石器の一群（同編年の第６段階）とに分けることができる。北牛牧型ナイフ形石器については横長の剥片や斜め剥ぎの剥片を素材とし、幅狭な基部（刃部と基部の割合がほぼ１：１となる）を作り出すもので県内では北牛牧第５遺跡等で確認されている。

これらのうち前者については、主にＣ１・Ｄ１区の南側及びＣ３区等で確認されているのに対し、後者はＣ２区ブロック１やＣ１区ブロック２等で出土している。後者については同ブロック内で表面にポジ面を有するナイフ形石器や剥片尖頭器が共に出土している。今峠型ナイフ形石器・北牛牧型ナイフ形石器と剥片尖頭器との共伴関係についてはさらに検討する必要があるが、岩戸遺跡第１文化層や那珂遺跡等では今峠型ナイフ形石器に利用される素材の中にポジ面を有するものがあり、関連性が認められる。

角錐状石器については、縦長剥片を素材としたものが多く確認されている。三面加工のものが半数以上を占め、７㎝以上を超えるものが多く認められた。また三面加工のもののうち、10㎝以上を超える大型のものが３点（接合後）確認されているが、いずれも中程で折損している。なおＣ１区ブロック４内では出土数の約４割の６点（接合後、大半がホルンフェルス製）がまとまって確認されており、興味深い。

スクレイパーは、厚手で表面に自然面を有するラウンドスクレイパーやエンドスクレイパーをはじめ、縦長剥片を素材とするエンドスクレイパーや同左に基部加工を有するもの、縦長剥片を素材とし、一側縁もしくは二側縁に刃部を形成した石清水型削器等、バラエティーに富む。

なかでも縦長剥片素材で基部加工を有するもの（274、308、337）については、308のように基部加工と先端部のみ加工されるものや打面を除き、加工が縁周を巡るもの（274）と一部を残し加工が巡るもの（337）とが認められる。前者はその形状から剥片尖頭器にリダクションを行い、スクレイパーに転用した可能性が高く、また337についても表面の左側縁下部については、微細な剥離痕を有することから、基部加工のナイフ形石器を転用したものと考えられる。274については加工が縁周に及ぶためにリダクションかどうかの判別が難しいが、基部を作り出す特徴等、剥片尖頭器やナイフ形石器に共通する部分も認められることから石清水型削器と同様に第５段階のものと考えられる。

次に剥離技術についてみていくと、平坦打面から一定方向に剥離を行うものや両設打面から剥離を行なうもの、求心状に剥片剥離を行うもの、打面と作業面を90°入れ替えながら剥離を行なうもの、打面転位を繰り返しながら剥離するもの、剥片を素材として剥片剥離を行なうもの等が確認されている。

そのうち平坦打面から一定方向に剥離を行うものや両設打面から剥離を行なうものでは縦長剥片が剥出されており、167～169等といった10cmを超す大型の縦長剥片が認められる。また剥片を素材として剥片剥離を行なうもののなかには、201や231、338等、少量ながら、瀬戸内技法を意識した石核も存在する。

第Ⅲ文化層とした細石核等については、Ⅲ層下部からⅣ層上部で出土し、同編年の第９～10段階に比定できる。382は舟形状を呈し、打面側のみ石核調整を行うことから船野型細石核に相当し、素材のあり方や調整等より同細石核でも古い様相を呈する。これに対し、383は主要剥離面を側面に置き、左側縁に主要剥離面から調整を行う等、西海技法の影響を受けているものと想定される。同様の例が阿蘇原上遺跡で出土しており、槍先形尖頭器や爪形文土器が共伴する可能性が高いとされ、382より新しい様相を有する。

【註】

1）宮崎県旧石器文化談話会　2005「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』第66号　旧石器談話会
　秋成雅博　2005「宮崎10段階編年の概要」『九州旧石器』第９号　九州旧石器文化研究会

２．林遺跡の掘立柱建物群について

林遺跡で検出された掘立柱建物は、Ａ区で５軒、Ｂ区で３軒、Ｃ区で14軒、Ｄ区で13軒である。これは、発掘調査時に現地で認定できた建物の数である。通常、掘立柱建物の認定は、ピットが直線的かつ一定間隔で並ぶこと、それぞれのピットの径や深さが近似していること、埋土の特徴が近似していることなどを手がかりにする。しかし、現地で認定できた35軒以外に、ピットが集中する地点が数カ所認められたことから、更に数軒の建物が存在した可能性も指摘される。

掘立柱建物は、遺構の特質として次の２点が指摘される。

①遺構としての掘り込みが柱穴のみであり、他の遺構に比してその面積が小さいこと。

②使用時の床面レベルが特定しづらいこと。

こうしたことから、明確に遺構に伴う遺物を特定することが難しく、時期の認定も困難である。そのため、建物間の同時性を抽出する場合、立地の状況や棟方位、柱間隔など、遺構としての属性の共通点を見いだす作業が重要となる。

A区では、ＳＢ１、ＳＢ２、ＳＢ５の棟方位がほぼ一致あるいは直交する状況であり、同時存在の可能性が高い。また、ＳＢ３とＳＢ４は棟方位に若干の差異が見られるものの、重複していること、２×３間の構造が共通すること、柱間隔が近似することなどから、連続する時期の立て替えによるものと推定される。

B区では、３軒の建物が相互に離れた位置に存在していることから、立地状況からは同時存在を肯定も否定もできない。しかし、通路としての機能も想定される溝状遺構ＳＥ２・ＳＥ３の主軸方位と、それぞれの建物の棟方位がほぼ直交することから、これらの遺構は同時もしくは近似する時期に存在したものと推定される。

C区は、最も多くの掘立柱建物が確認された地区であるが、その分布は５つのまとまりで捉えることができる。仮にⅠ群からⅤ群と呼称する。

Ⅰ群＝ＳＢ１　　Ⅱ群＝ＳＢ２、ＳＢ３

Ⅲ群＝ＳＢ４、ＳＢ５、ＳＢ６、ＳＢ７、ＳＢ８　　Ⅳ群＝ＳＢ９、ＳＢ10、ＳＢ11、ＳＢ12

Ⅴ群＝ＳＢ13、ＳＢ14

これら群としての同時存在については、肯定も否定もできない。

Ⅰ群はＳＢ１の１軒のみで、棟方位が他の４群と大きく異なっている。

Ⅱ群では、ＳＢ２とＳＢ３が重複しており、同時存在は否定される。棟方位に２°の相違が見られる。

Ⅲ群は５軒で、その棟方位はＮ－17°－ＥからＮ－20°－Ｅと３°の範囲にまとまっている。その中で、近接するＳＢ４とＳＢ５、重複するＳＢ５とＳＢ６、ＳＢ６とＳＢ７の同時存在は不可能である。これらを整理すると、ＳＢ４－ＳＢ６－ＳＢ８、あるいはＳＢ４－ＳＢ７－ＳＢ８、そしてＳＢ５－ＳＢ７－ＳＢ８の場合に同時存在が可能で、いずれも最大で３軒となる。

Ⅳ群は４軒で、棟方位はＳＢ９のＮ－68°－Ｗに対してＳＢ11がＮ－22°－Ｅと直交の関係であり、ＳＢ12も僅かに１°の違いである。これに対し、ＳＢ10はＮ－65°－Ｗとやや異なっている。しかし、ＳＢ10は背後が約１ｍの段差（Ｃ１区とＣ２区の境界）となっていることから、棟方位の差異は時期差ではなく地形条件によるものとも考えられる。ＳＢ11とＳＢ12は、共に柱穴径がやや大きめで、梁行と棟方位もほぼ一致しているが、両者の間隔は１ｍ以内と密接しているため、同時存在は考えにくい。

Ⅴ群は、Ⅰ～Ⅳ群に対して１段高くなったテラス面（Ｃ２区）に存在する。ＳＢ13とＳＢ14の棟方位は一致し、その間隔も十分に保たれていることから、同時存在は可能である。他群の建物と棟方位が異なっているが、これは地形に合わせた結果と考えられる。他の建物群よりも建物構造・柱穴径・柱穴深のいずれもが飛び抜けて大規模であり、立地的にも最奥の一段高い場所にあることから、林遺跡検出の建物群の中心的存在であることは間違いない。特に、ＳＢ13は四面庇で３×５間の総柱建物であり、柱穴も径と深さが他を圧倒している。こうした建物は、一般的な住居機能のものとは考え難く、寺社や公的な性格を持つものを想起させる。しかし、付近からの瓦の出土は皆無であり、瓦葺きではなく板葺き、あるいは茅葺きであったと思われる。

D区では、13軒の建物がＤ１区からＤ３区の各段に見られた。Ｄ１区の３軒は、相互に離れた位置に

存在し、棟方位も全く異なっている。明確な関連性は見いだし難い。Ｄ２区、Ｄ３区は共に幅の狭いテラス面であり、いずれの建物もその地形に沿うように建てられている。Ｄ２区には５軒が存在するが、ＳＢ７とＳＢ８が重複すること、ＳＢ６とＳＢ８が密接していることから、それぞれの同時存在は否定される。Ｄ３区も５軒が存在する。ＳＢ11とＳＢ12が重複するが、それ以外の建物との同時存在を否定するものはない。

以上、林遺跡の掘立柱建物群について概観した。個別に時期を特定することは不可能であり、変遷を示すこともなし得ないが、群としてのあり方にはある特徴が見られた。

各区・各群毎の建物に３軒以上の重複は見られず、Ｃ２区を除けば、検出されたピットの密度も高いとは言い難い。しかし、比較的規模の大きな建物が多いことは特徴の一つである。このことは、長期間にわたり安定的に営まれた集落ではなく、短期的に、あるいは断続的に使用された館のような性格を想定しておきたい。

３．五輪塔群について

Ｂ区から多数の五輪塔が出土した。本来のセット関係を復元できるものは皆無であり、各部位の総数で200個近くにもなるが、部位別の計測では水輪の64個が最多である。このことから、林遺跡周辺には最低でも60基を超える五輪塔群が存在していたことになる。ほとんどが軟質の灰色凝灰岩製であり、強い衝撃を受けると容易に割れたり細かく砕けたりすることから、実際には更に多くの五輪塔が存在したものと推定される。

五輪塔のほとんどは、石組井戸（Ｂ５区ＳＦ１）や、溝状遺構の石列（Ｂ３区ＳＥ１、Ｂ５区ＳＥ２）に転用されたり、斜面に投棄された状態で出土しており、原位置を保って出土したものはＢ６区ＳＤ１の地輪のみである。

出土の状況を考えると、本来的には丘陵の東向き斜面に設けられた小テラス（Ｂ６区とＢ７区）に造営されていたものと考えられる。

周囲に寺院址等も見られない場所に、これほど多数の五輪塔群が造営された理由は不明であるが、15世紀から16世紀にかけて展開された県土持氏と門川伊東氏、大友氏と島津氏の争いは、延岡、日向、木城などを舞台としており、そうした争乱に関わる供養塔としての建立も可能性の一つとして指摘されよう。

林遺跡の立地する地点は、大瀬川・五ヶ瀬川が形成した狭小な延岡平野の南端にあたる。遺跡から約1.5km西に上伊形城が、舌状に張り出した丘陵端部を挟み南に2.3kmには土々呂松尾城が存在した。さらに山間を縫って南下すると門川の港を取り囲むように松尾城、江田城、佐々宇津城が点在する。まさに、県土持氏と門川伊東氏の対峙する位置に、林遺跡は立地しているのである。

地区	遺構番号	構造（間×間）	梁行(cm)	桁行(cm)	棟方位	備考
A区						
A１区	ＳＢ１	２×４	410	935	N−80°−W	
A１区	ＳＢ２	１×３	365	610	N−18°−E	
A１区	ＳＢ３	２×３	330	610	N−61°−W	
A１区	ＳＢ４	２×３	355	540	N−68°−W	
A１区	ＳＢ５	２×３	310	520	N−19°−E	
B区						
B４区	ＳＢ１	１×３	395	590	N− 6°−E	
B４区	ＳＢ２	２×３	440	675	N− 4°−E	
B５区	ＳＢ３	３×６	480	1,160	N− 9°−E	一面庇
C区						
C１区	ＳＢ１	１×５	400	1,130	N−79°−W	一面庇
C１区	ＳＢ２	２×４	420	760	N−18°−E	
C１区	ＳＢ３	２×５	490	920	N−20°−E	
C１区	ＳＢ４	１×２	300	580	N−19°−E	
C１区	ＳＢ５	２×５	500	1,020	N−17°−E	
C１区	ＳＢ６	２×４	490	800	N−73°−W	
C１区	ＳＢ７	１×２	300	500	N−18°−E	
C１区	ＳＢ８	２×４	400	1,050	N−18°−E	
C１区	ＳＢ９	２×２	310	490	N−68°−W	
C１区	ＳＢ10	２×４	500	920	N−65°−W	
C１区	ＳＢ11	２×４	500	770	N−22°−E	
C１区	ＳＢ12	２×３	500	720	N−23°−E	
C２区	ＳＢ13	３×５総柱	600	1,000	N−29°−E	四面庇
C２区	ＳＢ14	２×７	430	1,370	N−29°−E	
D区						
D１区	ＳＢ１	２×３	430	640	N−74°−W	
D１区	ＳＢ２	２×６	400	1,350	N−88°−W	二面庇
D１区	ＳＢ３	２×４	400	780	N−23°−E	
D２区	ＳＢ４	２×３	480	580	N−15°−E	
D２区	ＳＢ５	１×２	240	490	N−62°−W	
D２区	ＳＢ６	２×２	350	430	N−64°−W	
D２区	ＳＢ７	２×６	400	1,150	N−65°−W	
D２区	ＳＢ８	２×４	500	900	N−65°−W	
D３区	ＳＢ９	２×３	380	(350)	N−13°−E	
D３区	ＳＢ10	４×４	930	1,050	N−73°−W	
D３区	ＳＢ11	２×２	580	640	N−22°−E	
D３区	ＳＢ12	２×２	440	600	N−65°−W	
D３区	ＳＢ13	２×２	390	650	N−24°−E	

第30表　林遺跡検出　掘建柱建物一覧

林遺跡A区全景

A区全景（北から）

A1区　SA1

A1区　SB1

A1区　SB2

新図2

A1区 SB3・4

A1区 SB5

A1区 SC12

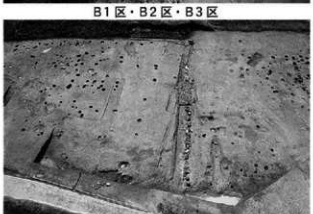
A1区 SC2

A1区 SC3

林遺跡B区全景

B1区・B2区・B3区

B4区

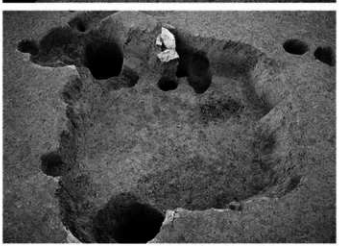


B5区　SE2・3

B6区・B7区

図版4

B3区 SA1



B3区 SA2

B3区 SA3

B3区 SE1

B5区　SF1（検出状況）

同上（完掘状況）

B5区　SE2・3（検出状況）

同上（完掘状況）

B６区　ＳＤ１（検出状況）

B６区廃棄五輪塔（検出状況）

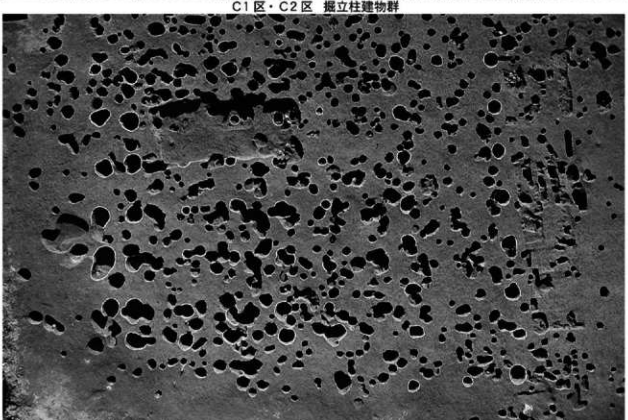
B７区　ＳＤ２（検出状況）

同上（完掘状況）

林遺跡C区全景

C1区（奥）・C2区（手前）

C1区・C2区　掘立柱建物群



C2区　SB13・SB14

図版9

C4区 SC1

C3区 SD1

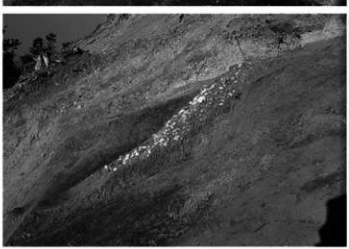
C4区 SC2

C4区 SC4

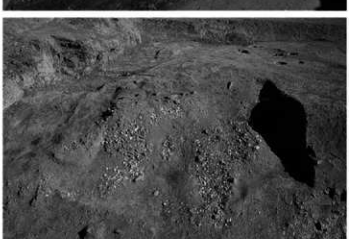
図版10

C4区　SC3

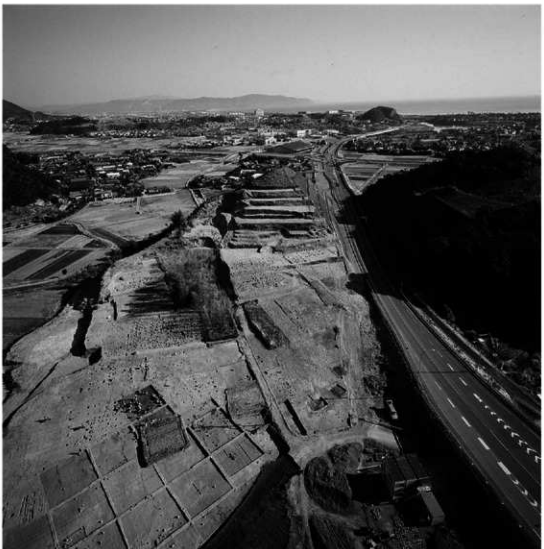
C2区　SC5



C2区　SZ1（貝殻集積断面）



同上（検出状況）



林遺跡　C区・D区全景

D区全景

図版12

D1区

D2区・D3区